

第四章 『大漁』を読む前後における大漁イメージの変化

4-1 サンプルング結果

2-5 連想マップ調査の概要でも簡単に述べたが、クラス担任が調査の説明・詩の朗読を行い、著者自身が立ち会わない場合の調査と、著者自身が調査の説明・詩の朗読を行った場合がある。表 4-1 の調査形式の欄には、前者を“クラス担任”、後者を“著者自身”と記入している。また、調査形式がクラス担任の学校の調査日は依頼日を記入している。

表 4-1 各小学校の調査形式と調査日

▼地域名	▼小学校名	▼調査形式	▼調査日
市街地	平田	クラス担任	9/3 依頼
	佐和山	クラス担任	9/5 依頼
	城西	クラス担任	9/4 依頼
山間部	日栄	著者自身	9/12
	多賀	著者自身	10/8
	秦荘東	著者自身	10/17
臨海部	西	著者自身	10/22
	松原	著者自身	10/15
琵琶湖沿岸部	朝日	クラス担任	9/2 依頼

結果を分析する際に考慮すべき点として、著者自身が調査を行った際に気付いたことだが、児童にとっては、初めて会う著者が教室に入ってきて調査を行うということ自体が珍しい経験である。そのため、調査自体への集中度があまり高くないと考えられる。連想マップを書くことに関しては、手を動かす作業であるので、前者と後者の違いはあまりないと思う。しかし、詩の朗読や児童自身が声に出さずに詩を読む際には、集中度の違いが出ると考えられる。実際、著者が詩の朗読をしてもあまり聞いていない児童が見られた。つまり、著者自身が調査を行った学校では、クラス担任が調査を行った学校以上に詩の影響が結果に表れにくいと考えられる。調査形式の違いによる結果の違いに関しての他の要因としては、児童自身が“詩の言葉を連想マップに書こうとしたか”どうか挙げられる。著者が調査を行った学校では、読後に連想マップを書く際に、「詩を読んでどのように感じたか」など、詩の言葉などを意図的に連想マップに書かせるような誘導は一切行わなかった。一方、クラス担任にお願いする際には、詩に対する感想は言わないようにあらかじめお願いしておいた。しかし、「詩をよんでどのように感じたか」などの児童への言葉掛けに関しては決めておかなかった。そのため、クラスによってはそのような言葉掛けが行われ、詩の影響を受けたサンプルもあると考える。

よって、4-2 『大漁』を読む前後におけるイメージ変化分析では調査形式の違う学校

での比較（市街地と山間部、市街地と臨海部の比較）は行わない。（図 4-1 参照）

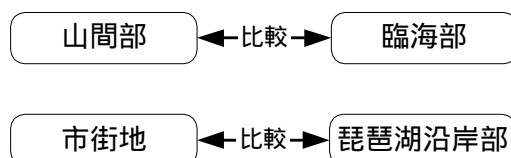


図 4-1 イメージ変化分析における比較対象

次に、サンプル数について述べる。表 4-2、表 4-3 には読前と読後で一つのサンプルとした数値を記入している。

琵琶湖沿岸部の朝日小学校に関しては、他地域に比べてもサンプル数が少ないことが分かる（表 4-2 参照）。そのため、一人の想起が全体に占める割合も高くなり、想起率が全体的に高くなるため、他地域との比較が難しくなる。また、省略して読ませる場合の調査に関しては、ほぼ全てのサンプルが第 1 位連想語のみの記述であり、連想のつながりを見る本研究のサンプルとしては不適当だと判断したため分析から除外した。これは、本研究最初の調査依頼であったため、不手際な点もあって調査方法を意図した通りにクラス担任に伝えられなかった部分があったためだと考えられる。

山間部の秦荘東小学校では 1 クラスのみでの調査となったため、全部読ませる調査を実施した。

表 4-2 全部読ませる調査におけるサンプル数

全部	山間部			市街地			臨海部		琵琶湖沿岸部	合計
小学校名	多賀	日栄	秦荘東	城西	平田	佐和山	西	松原	朝日	
4 年	32	24		21		37	24		30	168
5 年		17			36	34		29		116
6 年			31			27		26	28	112
小学校別計	32	41	31	21	36	98	24	55	58	396
地域別計	104			155			79		58	

表 4-3 省略して読ませる場合におけるサンプル数

省略	山間部			市街地			臨海部		琵琶湖沿岸部	合計
小学校名	多賀	日栄	秦荘東	城西	平田	佐和山	西	松原	朝日	
4 年	28			21		40	23		-	112
5 年		16			33	34		29	-	112
6 年		26				27		30	-	83
小学校別計	28	42		21	33	101	23	59	-	307
地域別計	70			155			82		-	

本研究における分析対象に関するサンプルの条件を以下に挙げる。

- 読後に連想マップが無記述のサンプルは本研究の分析対象から除外する。これらのサンプルは、読前で記述し、大漁に関するイメージがあるにも関わらず読後には無記述であるために、サンプルとして適当でないと判断した。
- 読前に無記述で、読後に記述のあるサンプルは分析対象とする。これらのサンプルに関しては、詩を読んで大漁のイメージが形成されたと考えられるので分析対象とした。
- 「大量」という言葉から連想されたと考えられるサンプルについても分析対象とする。勘違いするということは、「大漁」について知らない(ほとんど知らない)と考えることができ、大漁イメージのない(少ない)サンプルとして考えるためである。

以上の条件を満たすサンプルを分析対象とした結果、全部読ませる調査ではサンプル数が 396 になり、省略して読ませる調査では 307 である。合計サンプル数は 703 で、これを本研究の分析に用いるサンプルとする。

次に、学年別のサンプル数の割合をグラフにしたものを図 4-2、図 4-3 に示す。4 年生のサンプル数と 6 年生のサンプル数に差がある場合に、サンプルの取り方に隔たりがあると考えることができる。

図 4-2 は全部の調査におけるグラフであるが、山間部と市街地においては、4 年生のサンプル数が多く、全体として偏りがある。

図 4-3 は省略の調査におけるグラフであるが、市街地において 6 年生のサンプルが少なく、偏りがある。

以上のことから、サンプルの取り方に関しては若干不備があるものの、分析としては学年を分けて行う。これは学年別に分けてしまうとサンプル数が少なくなってしまう、分析の際に個人の一つの連想の重みが高くなりすぎてしまうためである。

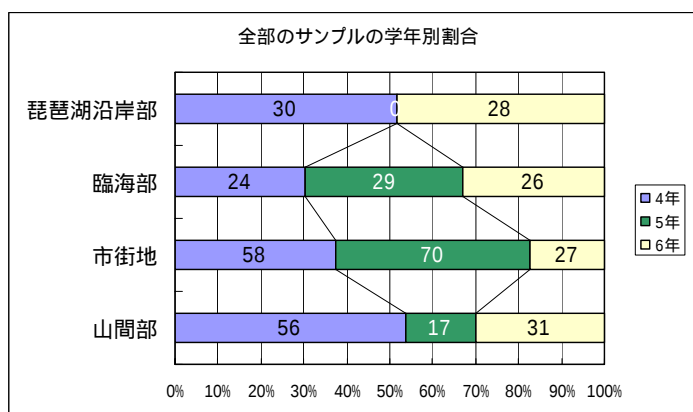


図 4-2 全部の調査におけるサンプル数の学年別割合

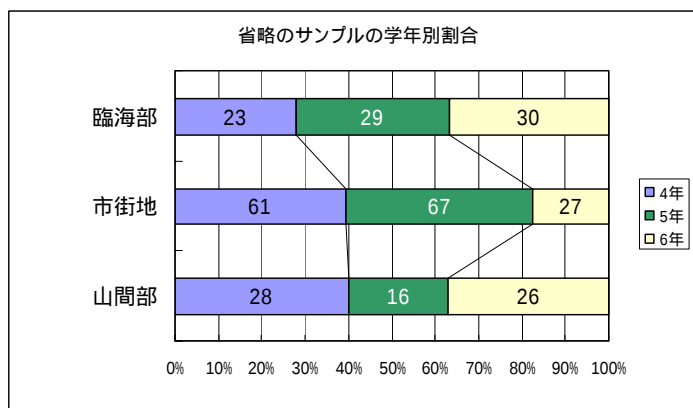


図 4-3 省略の調査におけるサンプル数の学年別割合

4-2 『大漁』を読む前後におけるイメージ変化分析

4-2-1 イメージ変化分析に用いる対象サンプル数

表 4-4 イメージ変化分析の対象サンプル数

	▼山間部	▼市街地	▼臨海部	▼琵琶湖沿岸部	合計
全部	104	155	79	58	396
省略	70	155	82	0	307

琵琶湖沿岸部の全部の調査ではサンプル数が少ないため、全体に対して1個の連想語の占める割合が高く、分析の際には考慮しなければならない点を最初に述べておく。また、市街地が他地域に比べてサンプル数が多いことから、若干想起率の値は小さくなるものだと考える。

4-2-2 想起率の増減から見た大漁イメージの変化

(1) 全体的な傾向

まず、個人別想起数（有向グラフ）の平均の変化を示したグラフを図4-4、図4-5に示す。読後には全部・省略のどの地域も増加している。これは、詩による影響と、同じ調査を2回実施したことによる影響の二つが考えられる。

図 4-4 個人別想起数（有向グラフ）の平均の変化

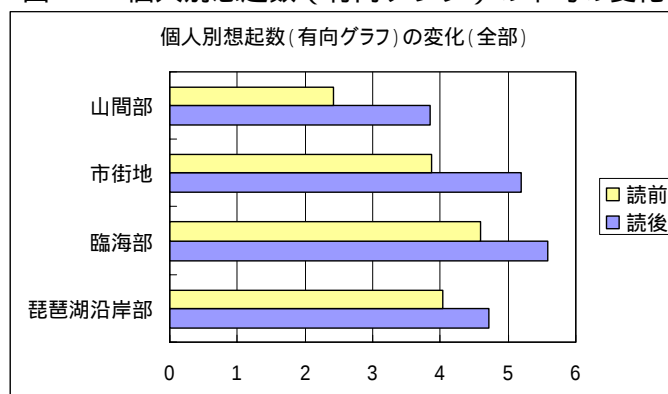
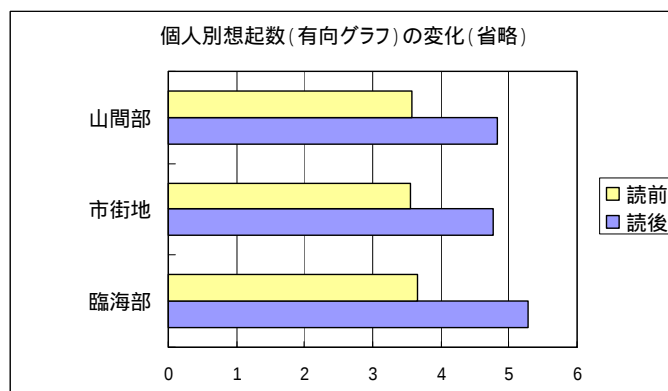


図 4-5 個人別想起数（有向グラフ）の平均の変化



(2) 山間部

■ 詩を全部読ませる調査 (表 4-5 参照)

読後に新しく想起された連想語のうち、詩の関連語カテゴリーに含まれる連想語は、「朝焼け」「小焼け」「浜」「祭り」「とむらい」「朝」「いわし」「おおばいわし」の8語である。そして、詩の関連語カテゴリーにおける一人当たりの想起数は0.50である。これらの連想語は、詩を読んだときの記憶がそのまま読後の連想マップ調査で想起されたと考えることができる。

「うれしい」も読後に新しく表れた連想語であり、『大漁』を読むことで、風景が具体的にイメージできた児童が数人いたと考えられる。「死ぬ」も同様に新しく表れた連想語であり、これは魚の立場で考えた連想語である。これは、『大漁』の後半部の視点が変わる部分の影響を受けたと考えられる。

また、「寿司」「大トロ」「トロ」「焼く」などの連想語に関しては、自分が魚を食べることをイメージした児童が増えたことを示す。「おいしい」が+0.07、「食べる」が+0.05であることからそのことがわかる。「海」は+0.16であり、想起率の増加が最も大きい連想語である。

全体的に詩の影響は少ないが、著者自身が調査を行ったことが要因だと考えられる。そ

表 4-5 山間部 (全部) におけるカテゴリー・品詞分類

読前	構成物・風景		読後	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人		自然物	人工物・人	
名詞	魚 0.80	船 0.19	名詞	魚 0.78	船 0.27	朝焼け 0.04
	海 0.23	漁師 0.17		海 0.39	漁師 0.17	小焼け 0.04
	水 0.05	つり 0.11		水 0.06	つり 0.12	浜 0.08
	川 0.05	網 0.05		川 0.04	網 0.07	祭り 0.05
	大物 0.03	人 0.05		大物 0.03	人 0.07	とむらい 0.06
		食べ物 0.03		群れ 0.05	食べ物 0.04	朝 0.03
魚の種名	まぐろ 0.05		魚の種名	まぐろ 0.05		いわし 0.15
	さんま 0.04			さんま 0.03		おおばいわし 0.05
	たい 0.03			たい 0.03		
	ひらめ 0.03			大トロ 0.04		
形容詞・ 形容動詞			形容詞・ 形容動詞	トロ 0.03		
				さけ 0.04		
動詞			動詞			
小計	1.31	1.07	小計	1.65	1.69	0.50
合計	2.38		合計	3.84		

0.03 < R < 0.05	
0.05 < R < 0.1	
0.1 < R < 0.3	
0.3 < R < 0.6	
0.6 < R	

他の原因として、個人別想起数（有向グラフ）の平均、すなわち大漁に関するイメージ量が少ないため、詩の理解も少なかったことが考えられる。

■ 詩の後半部を省略して読ませる調査（表 4-6 参照）

読後に新しく想起された連想語のうち、詩の関連語カテゴリーに含まれる連想語は、「朝焼け」「浜」「祭り」「朝」「いわし」「早い」の6語である。そして、詩の関連語カテゴリーにおける一人当たりの想起数は0.45である。山間部（全部）の調査と同様に、著者が自ら調査を行ったことや大漁に関するイメージ量が少ないことが、詩の影響が少ないことの要因だと考えられる。

また、省略して読ませていることから、魚の立場にたった連想語は表れていない。全体の特徴としては、読後に形容詞・形容動詞、動詞の連想語の増加が目立つ。最も増加した連想語は「船」で+0.13である。

表 4-6 山間部（省略）におけるカテゴリー・品詞分類

読前	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人	
名詞	魚 0.93	船 0.33	
	海 0.46	漁師 0.21	
	水 0.04	網 0.19	
	川 0.03	漁業 0.13	
		つり 0.06	
		港 0.04	
		食べ物 0.04	
魚の種名	貝 0.04		
	かに 0.03		
形容詞・形容動詞		いっぱい 0.34	
		うれしい 0.14	
		多い 0.09	
		重い 0.04	
		大きい 0.03	
動詞		食べる 0.14	
		とる 0.10	
		とれる 0.07	
		泳ぐ 0.06	
		儲かる 0.03	
小計	1.53	1.95	
合計	3.48		

→

読後	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人	
名詞	魚 0.84	船 0.46	朝焼け 0.03
	海 0.50	漁師 0.21	浜 0.06
	水 0.07	網 0.19	祭り 0.07
	川 0.03	漁業 0.16	朝 0.11
	波 0.03	つり 0.09	
	塩水 0.03	港 0.09	
		食べ物 0.04	
魚の種名	貝 0.04		いわし 0.11
	かに 0.04		
形容詞・形容動詞		いっぱい 0.41	早い 0.07
		うれしい 0.16	
		多い 0.06	
		重い 0.03	
		にぎわう 0.06	
		楽しい 0.04	
		広い 0.04	
動詞		きれい 0.03	
		いるんな 0.03	
小計	1.61	2.74	0.45
合計		4.80	

0.03 < R < 0.05
0.05 < R < 0.1
0.1 < R < 0.3
0.3 < R < 0.6
0.6 < R

(3) 市街地

■ 詩を全部読ませる調査 (表 4-7 参照)

読後に新しく想起された連想語のうち、詩の関連語カテゴリーに含まれる連想語は、「朝焼け」「小焼け」「浜」「祭り」「とむらい」「お葬式」「朝」「いわし」の8語である。そして、詩の関連語カテゴリーにおける一人当たりの想起数は1.00である。

大漁の喜びをイメージした連想語である「うれしい」「喜び」の想起率の増加は、それぞれ+0.07、+0.05であり、増加が目立つ。魚の立場である形容詞・形容動詞の連想語として「かわいそう」が0.10、「悲しい」が0.09と読後に新しく想起されている。魚の立場の動詞においては、「死ぬ」が0.10、「食べられる」が0.05、「減る」が0.05と新しく想起されている。これらのことから、詩の影響を受け、人間だけの立場からではなく、魚の立場で考えた児童がいることがわかる。

一方、「船」は-0.09であり、減少幅が大きい。他にも、名詞においては想起率の減少している連想語がいくつかあり、詩の関連語の連想語が新しく表れたことの影響だと考えることができる。

表 4-7 市街地 (全部) におけるカテゴリー・品詞分類

読前	構成物・風景		読後	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人		自然物	人工物・人	
名詞	魚 0.79	船 0.41	名詞	魚 0.78	船 0.32	朝焼け 0.05
	海 0.45	つり 0.26		海 0.51	つり 0.23	小焼け 0.04
	川 0.08	網 0.23		川 0.06	網 0.19	浜 0.08
	水 0.05	漁師 0.21		水 0.05	漁師 0.21	祭り 0.17
		港 0.1		生き物 0.03	港 0.06	とむらい 0.16
		人 0.03			人 0.06	お葬式 0.06
魚の種名	まぐろ 0.03		魚の種名		漁 0.03	朝 0.14
	いわし 0.03			まぐろ 0.03		
	さしみ 0.03			さんま 0.03		いわし 0.30
形容詞・形容動詞		いっぱい 0.37	形容詞・形容動詞		いっぱい 0.35	
		うれしい 0.14			うれしい 0.21	
		おいしい 0.11			おいしい 0.10	
		多い 0.08			多い 0.08	
		楽しい 0.08			楽しい 0.08	
動詞		いろんな 0.03	動詞		喜ぶ 0.05	
	人間の立場			人間の立場		
	魚の立場			魚の立場	かわいそう 0.10	
					悲しい 0.09	
動詞		食べる 0.10	動詞		食べる 0.15	
	人間の立場	とる 0.04		人間の立場	とる 0.06	
		とれる 0.03			とれる 0.05	
		泳ぐ 0.03			泳ぐ 0.03	
		売る 0.03				
合計			合計			
	小計	1.46		小計	1.97	1.00
合計			合計			
	合計	3.83		合計	5.23	

0.03 < R < 0.05	
0.05 < R < 0.1	
0.1 < R < 0.3	
0.3 < R < 0.6	
0.6 < R	

■ 詩の後半部を省略して読ませる調査（表 4-8 参照）

読後に新しく想起された連想語のうち、詩の関連語カテゴリに含まれる連想語は、「朝焼け」「小焼け」「浜」「祭り」「朝」「いわし」「おおばいわし」の7語である。そして、詩の関連語カテゴリにおける一人当たりの想起数は0.99であり、市街地（全部）の調査とほぼ同値である。

「魚」の想起率が読後には、- 0.14 と減少していることが特徴的である。それに対して、魚の種名の想起率の和が読前の0.22 から読後には0.40 となり、+ 0.18 の増加である。これらのことから、読後には、魚と連想する前に、具体的に魚の種類について何があるのかを考えた児童が多いことがわかる。

また、省略して読ませていることから、魚の立場の連想語は表れていない。

表 4-8 市街地（省略）におけるカテゴリ・品詞分類

読前	構成物・風景		読後	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人		自然物	人工物・人	
普通 名詞	魚 0.89	船 0.39	普通 名詞	魚 0.75	船 0.34	朝焼け 0.14
	海 0.41	網 0.17		海 0.48	網 0.16	小焼け 0.08
	水 0.05	漁師 0.17		波 0.07	漁師 0.16	浜 0.20
	川 0.03	つり 0.14		水 0.06	つり 0.10	祭り 0.21
	海草 0.03	漁業 0.03		川 0.05	人 0.09	朝 0.10
魚の 種名		人 0.03	魚の 種名	塩水 0.03	つりざお 0.05	
		つりざお 0.03		太陽 0.03	市場 0.03	
				砂 0.03		
	まぐろ 0.05			まぐろ 0.08		いわし 0.18
	さしみ 0.05			かもめ 0.08		おおばいわし 0.08
人間の 立場	さけ 0.05		人間の 立場	さしみ 0.07		
	さんま 0.04			さんま 0.05		
	えさ 0.03			さけ 0.03		
				たい 0.03		
				かに 0.03		
形容詞・ 形容動詞			形容詞・ 形容動詞	貝 0.03		
					いっぱい 0.23	
					多い 0.06	
					おいしい 0.08	
					うれしい 0.08	
動詞			動詞		おいしい 0.08	
					楽しい 0.05	
					新鮮 0.04	
					きれい 0.03	
					しょっぱい 0.03	
魚の 立場			魚の 立場			
人間の 立場			人間の 立場			
魚の 立場			魚の 立場			
小計	1.63	1.93	小計	1.9	1.96	0.99
合計	3.56		合計	4.85		

(4) 臨海部

■ 詩を全部読ませる調査 (表 4-9 参照)

読後に新しく想起された連想語のうち、詩の関連語カテゴリーに含まれる連想語は、「朝焼け」「小焼け」「浜」「祭り」「お葬式」「いわし」「おおばいわし」の7語である。そして、詩の関連語カテゴリーにおける一人当たりの想起数は0.49である。

魚の立場である連想語は「死ぬ」の1語のみであり、全体的に詩の影響は少ないと考えることができる。また、特に増減のある連想は見られない。山間部の調査と同様に、著者が自ら調査を行ったことが詩の影響が少ないことの要因となっていると考えられる。

表 4-9 臨海部 (全部) におけるカテゴリー・品詞分類

読前	構成物・風景		読後	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人		自然物	人工物・人	
名詞	魚 0.94	船 0.57	名詞	魚 0.94	船 0.57	朝焼け 0.05
	海 0.61	漁師 0.47		海 0.68	漁師 0.48	小焼け 0.04
	波 0.06	つり 0.20		波 0.08	つり 0.25	浜 0.11
	気比の松原 0.05	漁業 0.14		気比の松原 0.08	漁業 0.14	祭り 0.05
	沖合 0.03	網 0.11		砂 0.05	網 0.11	お葬式 0.04
		人 0.08		水 0.04	人 0.10	
		えさ 0.08		群れ 0.04	えさ 0.05	
		つりざお 0.05			つりざお 0.05	
		種類 0.05			種類 0.08	
		夏 0.05			夏 0.09	
		港 0.04			漁 0.05	
		一本づり 0.04			貿易 0.05	
		青 0.04			市場 0.04	
		旗 0.04			海水浴 0.08	
		海水浴 0.04				
		漁 0.03				
		ボート 0.03				
		仕事 0.03				
魚の種名	まぐろ 0.05		魚の種名	まぐろ 0.06		いわし 0.16
	さしみ 0.05			さしみ 0.04		おおばいわし 0.04
	さんま 0.04			さめ 0.04		
	すし 0.03					
人間の立場 形容詞・形容動詞		いっぱい 0.10	人間の立場 形容詞・形容動詞		いっぱい 0.08	
		大きい 0.08			大きい 0.05	
		広い 0.06			広い 0.08	
		青い 0.04			青い 0.08	
魚の立場 動詞		おいしい 0.04	魚の立場 動詞		おいしい 0.11	
					うれしい 0.04	
人間の立場 動詞		泳ぐ 0.10	人間の立場 動詞		泳ぐ 0.13	
		食べる 0.06			食べる 0.13	
		とる 0.05			とる 0.11	
		焼く 0.05			焼く 0.04	
魚の立場 動詞		乗る 0.03	魚の立場 動詞		売る 0.05	
				死ぬ 0.04		
小計	1.89	2.74	小計	2.09	3.04	0.49
合計	4.63		合計	5.62		

0.03 < R < 0.05
0.05 R < 0.1
0.1 R < 0.3
0.3 R < 0.6
0.6 R

■ 詩の後半部を省略して読ませる調査（表 4-10 参照）

読後に新しく想起された連想語のうち、詩の関連語カテゴリに含まれる連想語は、「朝焼け」「小焼け」「浜」「祭り」「朝」「いわし」「おおばいわし」の7語である。そして、詩の関連語カテゴリにおける一人当たりの想起数は0.63である。山間部、臨海部（全部）の調査と同様に、著者が自ら調査を行ったことが、詩の影響が少ないことの要因となっていると考えられる。

詩の関連語以外には、想起率の増減が0.10以上の連想語は「海」の+0.12のみであり、詩の影響は、詩の関連語の想起以外にはほとんどないと考えられる。

魚の種名カテゴリの想起率の和が0.1から0.29と+0.19である。魚の想起率の増減は-0.03とほとんど変わらないことから、「魚」の想起が魚の種名に置き変わったというのではなく、連想が活性化されて具体的な名前を考えたためだと考える。「遠洋」や「沿岸」「地引網」という連想語が読後に表れたことから同様のことが分かる。

また、省略して読ませていることから、魚の立場の連想語は表れていない。

表 4-10 臨海部（省略）におけるカテゴリ・品詞分類

読前	構成物・風景		読後	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人		自然物	人工物・人	
名詞	魚 0.90	船 0.35	名詞	魚 0.87	船 0.40	朝焼け 0.10
	海 0.55	漁師 0.20		海 0.67	漁師 0.21	小焼け 0.09
	水 0.10	つり 0.16		水 0.10	つり 0.15	浜 0.20
	生き物 0.10	人 0.07		生き物 0.07	人 0.05	祭り 0.04
	塩水 0.05	網 0.06		塩水 0.04	網 0.10	朝 0.04
	塩 0.04	つりざお 0.06		塩 0.04	つりざお 0.05	
		漁業 0.05		砂 0.13	漁業 0.06	
		漁 0.05		波 0.06	漁 0.05	
		貿易 0.04		川 0.05	貿易 0.04	
		青 0.04		遠洋 0.04	青 0.04	
魚の種名	まぐろ 0.06		魚の種名	まぐろ 0.06		いわし 0.12
	たい 0.04			たい 0.06		おおばいわし 0.04
形容詞・ 形容動詞		いっぱい 0.17	形容詞・ 形容動詞		いっぱい 0.17	
		広い 0.09			広い 0.12	
		おいしい 0.07			おいしい 0.09	
		大きい 0.06			大きい 0.06	
動詞		泳ぐ 0.13	動詞		泳ぐ 0.16	
		食べる 0.09			食べる 0.11	
		とる 0.05			とる 0.04	
					とれる 0.04	
小計	1.84	1.78	小計	2.4	2.31	0.63
合計	3.62		合計	5.34		

0.03 < R < 0.05
0.05 < R < 0.1
0.1 < R < 0.3
0.3 < R < 0.6
0.6 < R

(5) 琵琶湖沿岸部

■ 詩を全部読ませる調査 (表 4-11 参照)

読後に新しく想起された連想語のうち、詩の関連語カテゴリに含まれる連想語は、「朝焼け」「小焼け」「浜」「祭り」「とむらい」「お葬式」「朝」「何万もの」「海の中」「いわし」「おおばいわし」の 11 語である。そして、詩の関連語カテゴリにおける一人当たりの想起数は 1.47 である。

「魚」の想起率の減少が 0.31 と大きいのが、詩の関連語に想起が分散されたと考えられる。また、「漁師」「つり」「網」「市場」などの連想語の想起率の減少も大きい。つまり、詩の関連語カテゴリにおける想起率の和が大きく、構成物・風景の名詞カテゴリにおける想起率の和の減少が大きいことから、全体的に詩の影響が大きいサンプルだと言える。

表 4-11 琵琶湖沿岸部 (全部) におけるカテゴリ・品詞分類

読前	構成物・風景		読後	構成物・風景		詩の関連語
	自然物	人工物・人		自然物	人工物・人	
名詞	魚 0.91	漁師 0.29	名詞	魚 0.60	漁師 0.12	朝焼け 0.05
	海 0.38	船 0.16		海 0.31	船 0.12	小焼け 0.05
	川 0.12	つり 0.12		川 0.09	つり 0.03	浜 0.05
	水 0.10	網 0.10		水 0.16	人 0.12	祭り 0.21
	波 0.03	市場 0.10		波 0.03	漁業 0.03	とむらい 0.19
	生き物 0.03	人 0.09		生き物 0.05	食べ物 0.03	お葬式 0.14
	群れ 0.03	港 0.03		群れ 0.03	数 0.03	朝 0.09
	鳥 0.03	漁業 0.03				何万もの 0.09
		つりざお 0.03				海の中 0.07
		食べ物 0.03				
魚の種名			魚の種名			いわし 0.40 おおばいわし 0.17
形容詞・形容動詞	人間の立場	いっぱい 0.29 うれしい 0.12 おいしい 0.12 多い 0.07 広い 0.05 くさい 0.03	形容詞・形容動詞	人間の立場	いっぱい 0.24 うれしい 0.12 おいしい 0.07 多い 0.05 楽しい 0.03 すごい 0.03 しょっぱい 0.03	
魚の立場			魚の立場	悲しい 0.14 かわいそう 0.07		
動詞	人間の立場	食べる 0.22 泳ぐ 0.14 売る 0.09 運ぶ 0.05 とれる 0.05 とる 0.03 焼く 0.03 買う 0.03 跳ねる 0.03	動詞	人間の立場	食べる 0.16 泳ぐ 0.07 売る 0.05 運ぶ 0.03 とる 0.09 焼く 0.05 買う 0.03 喜ぶ 0.05	
魚の立場			魚の立場	死ぬ 0.09		
小計	1.63	2.33	小計	1.57	1.58	1.47
合計	3.96		合計	4.62		

0.03 < R < 0.05	
0.05 < R < 0.1	
0.1 < R < 0.3	
0.3 < R < 0.6	
0.6 < R	

（６）山間部と臨海部の比較

山間部と臨海部は直接著者が小学校に出向いて調査を行った地域であり、この点において条件が同じであるので比較対象とすることは上述した。

図 4-6 は全部の調査に関するグラフである。詩の関連語の比率は、詩の関連語における一人当たりの想起数を個人別想起数（有向グラフ）の平均で除した値である。魚の立場の比率は、魚の立場の連想語における一人当たりの想起数を、個人別想起数（有向グラフ）の平均で除した値である。これらの数値が高い程『大漁』の影響が大きいと考えることができる。人間の立場は、詩の関連語、魚の立場以外の連想語のカテゴリーのことである。

図 4-6 より山間部と臨海部では、詩の関連語に関しては山間部の方が 0.04 高く若干影響が大きいと考えることができる。しかし、数値自体は両地域とも高くなく、影響はあまりないと考えられる。魚の立場の比率も山間部では 0.008、臨海部では 0.007 とほぼゼロに近い。つまり、『大漁』の影響はほとんどないと考えられる。これらの要因としては、著者が自ら調査を行ったために、調査へあまり集中しておらず、詩の理解が浅かったためだと考えられる。しかし、全体的な影響は少ないが、中には『大漁』の影響を受けた特徴的なサンプルもある。それらについては 4-3 個別サンプルの考察でサンプル例を提示する。

また、省略に関しての詩の関連語の比率は、山間部が 0.09 で、臨海部が 0.12 である。後半部分は省略しているために魚の立場による連想語は表れていない。

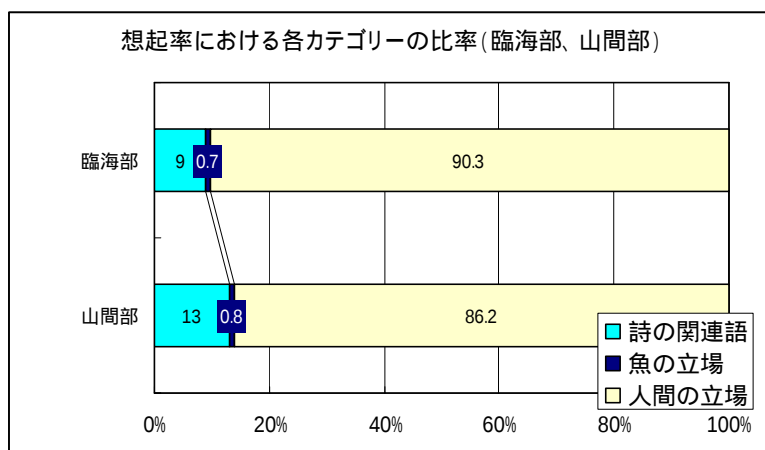


図 4-6 山間部と臨海部の想起率における各カテゴリーの比率（全部）

(7) 市街地と琵琶湖沿岸部の比較

市街地と琵琶湖沿岸部は、小学校のクラス担任に調査をお願いした地域であり、この点において条件が同じであるので比較対象とすることは上述した。

図 4-7 は図 4-6 と同様の計算方法によって求めたグラフである。

まず、詩の関連語の比率について述べる。市街地は 0.19 と全体の約 2 割が詩の関連語であり、ある程度の影響を受けていると考えることができる。琵琶湖沿岸部では 0.31 と全体の約 3 割を占め、詩の影響が大きいと考えることができる。

魚の立場の比率に関しては、市街地の方が 0.02 大きく、魚の立場で連想した児童が琵琶湖沿岸部の児童よりも多いことがわかる。

以上の結果はサンプル数の偏りに要因があると考えられる。市街地はサンプルがやや 4 年生に偏っているために、連想の傾向として形容詞・形容動詞、動詞の連想が多くなると考えられる¹⁾。以上のことが要因となって、魚の立場の連想、つまり魚の立場の形容詞・形容動詞、動詞が琵琶湖沿岸部より多く連想されたと考えることができる。

また、市街地の省略に関して、詩の関連語の比率は、0.21 である。後半部分を省略しているため、魚の立場による連想語は表れていない。

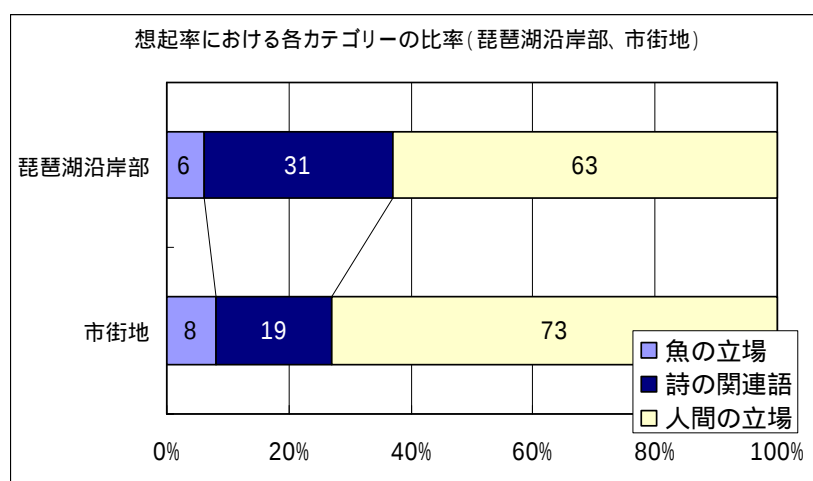


図 4-7 市街地と琵琶湖沿岸部の想起率における各カテゴリーの比率 (全部)

4-2-3 有向グラフから見た大漁イメージの変化

本節では、『大漁』を読む前後におけるイメージ変化の傾向を考察する。また、同一地域においての全部と省略の違いに関しても比較・考察を行う。さらに、山間部と臨海部、市街地と琵琶湖沿岸部で比較・考察を行う。ただし、市街地と琵琶湖沿岸部の比較においては、連想内容や割合の比較のみである。

表 4-12～表 4-18 の到達確率表とは、前後において到達確率の値が 0.03 以上の増減幅である連想と、詩の関連語、魚の立場の連想語を含んだ連想について抽出した表であり、網掛け部分は詩の関連語、魚の立場の連想語を含んだ連想を表している。出発連想語が魚、到達連想語が「 - 」の場合は、魚を出発連想語とする連想のことである。

(1) 山間部

■ 詩を全部読ませる調査 (図 4-8、表 4-12 参照)

読後に詩の影響を受けた連想は、「魚」から「いわし」、「朝焼け」から「小焼け」、「浜」から「祭り」、「海」から「浜」であり、到達確率は順に、0.03、0.03、0.02、0.02 である。これらの連想における一人当たりの連想数を個人別リンク数 (有向グラフ) の平均で除すると 0.05 となり、全体の約 5% が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であることが分かる。「朝焼け」から「小焼け」、「浜」から「祭り」の連想は詩の記述そのままの連想であり、詩を読んで記憶に残っていたことが要因であると考えられる。それに対して、「とむらい」は言葉としては残っていたが、意味については深く考えられなかったため、どの連想語ともつながらなかったと考えられる。「死ぬ」については、どの連想語ともつながっていないが、魚が死ぬことを意味していることは明らかであり、詩の影響を受けて、魚の視点が付加された児童がいることがわかる。

表 4-12 より、詩を読む前後において、到達確率の増加が大きいものは、「魚」から「生き物」、「海」から「魚」、「海」から「船」で +0.05 である。「魚」から「生き物」の連想は読前には表れなかった連想である。「海」から「魚」、「海」から「船」の連想が増加したのは、「海」の想起率の増加 (+0.16) の影響だと考えられる。また、「魚」を出発連想語とする連想が +0.23、「魚」を到達連想語とする連想が +0.14 と増加していることから、全体的に魚を中心とした連想が起きていることが分かる。

4-2-2 想起率の増減から見た大漁イメージの変化でも述べたが、「食べる」を到達連想語とする連想、「おいしい」を到達連想語とする連想、「食べる」から「おいしい」の連想の値からも分かるとおり、魚を食べることを具体的にイメージした児童が多いことがわかる。

表 4-12 山間部 (全部) における到達確率表

	出発連想語	到達連想語	増減幅
増加	魚	いわし	0.03
	朝焼け	小焼け	0.03
	浜	祭り	0.02
	海	浜	0.02
	魚	-	0.23
	海	-	0.13
	漁師	-	0.05
	-	魚	0.14
		海	0.07
		船	0.07
		網	0.03
		食べる	0.07
		おいしい	0.1
	魚	生き物	0.05
	海	海	0.04
		魚	0.05
減少	食べ物	船	0.05
		おいしい	0.04
	大きい	魚	▲0.03
	魚	つり	▲0.03

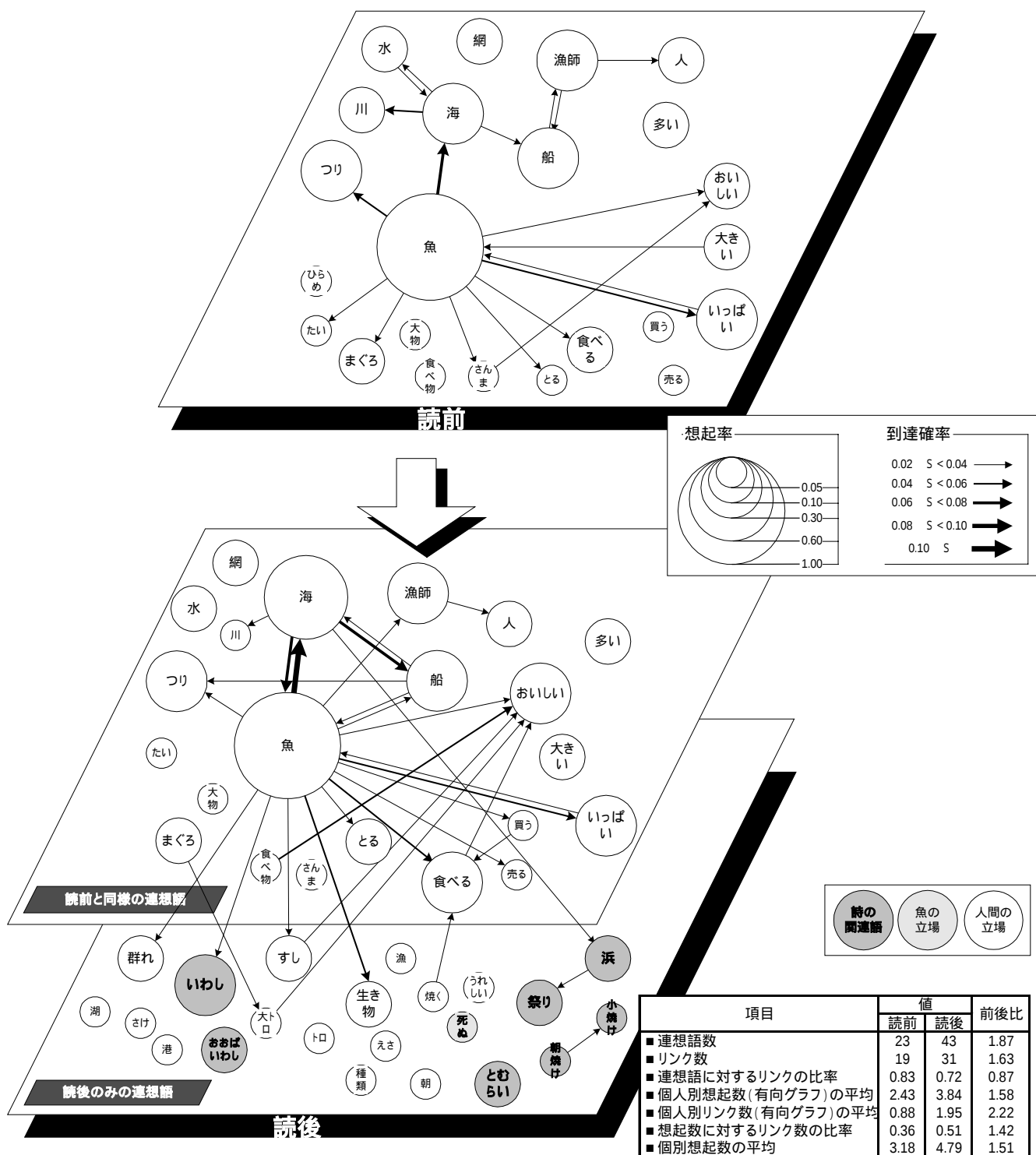


図 4-8 山間部（全部）の児童における『大漁』を読む前後のイメージ構造

■ 詩の後半部を省略して読ませる調査（図 4-9、表 4-13 参照）

読後に詩の影響を受けた連想は、「魚」から「いわし」、「海」から「浜」、「朝」から「早い」であり、到達確率は順に、0.07、0.03、0.07 である。これらの連想における一人当たりの連想数を個人別リンク数（有向グラフ）の平均で除すると 0.07 となり、全体の約 7% が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であることが分かる。さらに、「朝焼け」から「小焼け」のような、詩の記述そのままの連想がなく、全部の調査とは連想内容が違っていると言える。

魚の想起率は『大漁』を読む前後で 0.09 減少しているが（4-3-2 想起率の増減から見た大漁イメージの変化参照）表 4-13 より、「魚」を出発連想語とする連想は 0.18 増加している。「海」を出発連想語とする連想も 0.14 増加しており、「魚」と「海」の 2 つの連想語を起点とした連想が起きていることが分かる。詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想を除いて、最も到達確率の増加が大きいのは「漁師」から「船」の連想で + 0.06 である。「漁師」の想起率の増減は 0 であるにも関わらず、「漁師」からの連想が増加しているということは、「漁師」に対する認識が深まったと考えることができる。

逆に、「網」の想起率は前後で変わらないにも関わらず、「船」から「網」、「網」から「船」の連想が減少している。

表 4-13. 山間部（省略）における到達確率表

	出発連想語	到達連想語	増減幅
増加	魚	いわし	0.07
	海	浜	0.03
	朝	早い	0.07
	魚	-	0.18
	海	-	0.14
	漁師	-	0.13
	魚	いっぱい	0.05
		きれい	0.03
		とる	0.03
	海	波	0.03
		船	0.04
		漁師	0.03
		広い	0.04
		遊ぶ	0.03
	船	魚	0.03
	漁師	船	0.06
	漁業	海	0.03
	うれしい	楽しい	0.03
	食べる	とる	0.03
	焼く	食べる	0.03
減少	魚	海	▲0.05
	海	魚	▲0.04
	船	網	▲0.05
	網	船	▲0.03

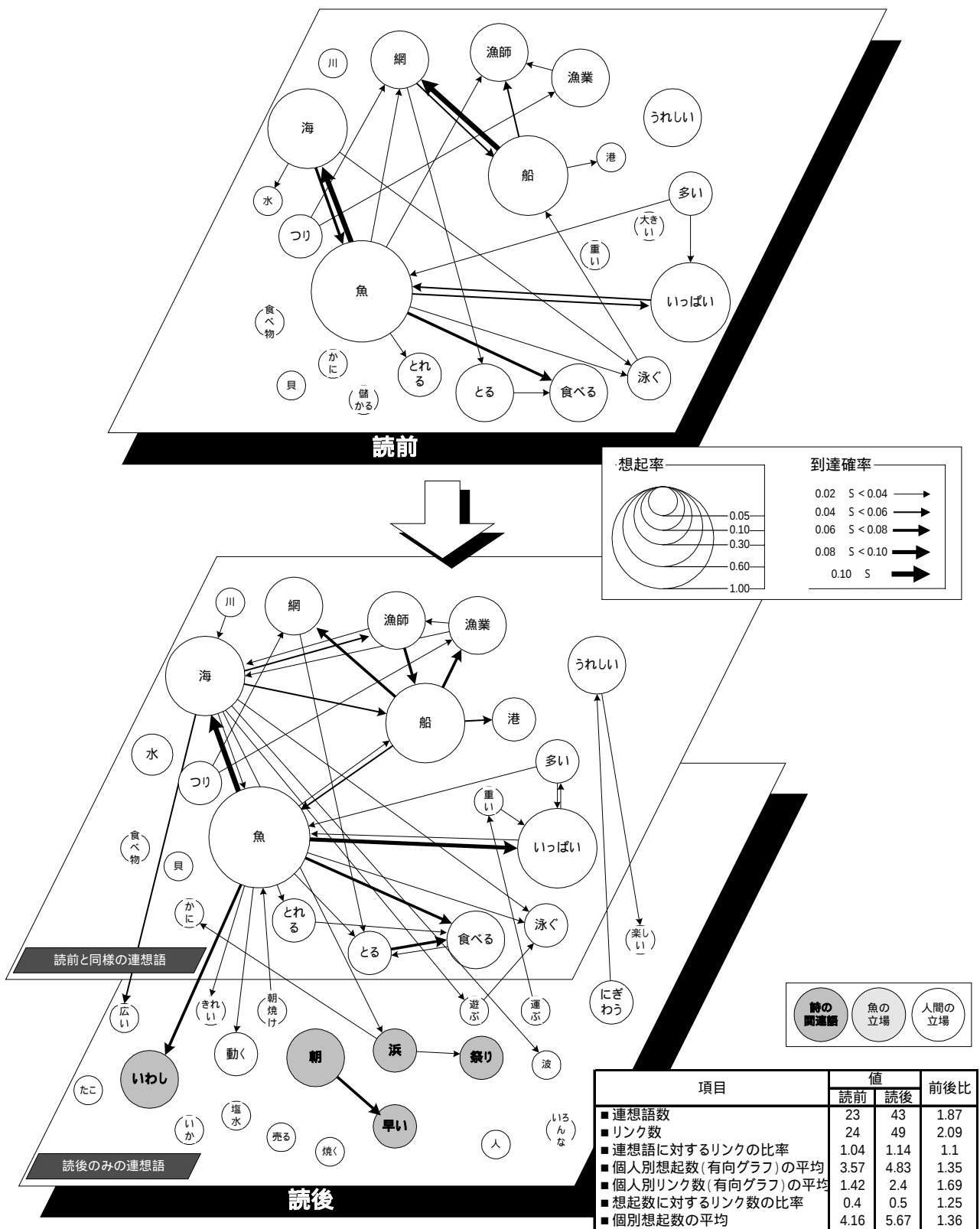


図 4-9 山間部（省略）の児童における『大漁』を読む前後のイメージ構造

(2) 市街地

■ 詩を全部読ませる調査 (図 4-10、表 4-14 参照)

表 4-14 の網掛け部分の面積や、図 4-10 の有向グラフからも視覚的にわかるように、『大漁』の影響を受けた児童が多いと考えられる。詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想における一人当たりの連想数は 0.63 であり、個人別リンク数 (有向グラフ) の平均で除すると 0.20 となり、全体の約 20% が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であることが分かる。特に、「魚」から「かわいそう」、「魚」から「悲しい」のように、捕られる魚の立場になった連想があることから影響の大きいことが分かる。「魚」から「死ぬ」のように、人間側から考えるだけでなく、魚の視点で連想した児童もいる。「食べられる」、「減る」に関しては、有向グラフ上ではどの連想語ともつながっていないが、どちらの連想語も魚が主語だということは明らかであり、視点を変えてイメージした児童がいることが分かる。また、「いわし」から「とむらい」が 0.05、「浜」から「祭り」が 0.06、「朝焼け」から「小焼け」が 0.04 と、詩の記述そのままの連想が多い。

「朝」は想起率が 0.14 と比較的高いにも関わらず、どの連想語ともつながっていないのは、想起した児童のほとんどが「大漁」という刺激語から直接想起した連想語であり、その後には連想が続かなかったということである。

表 4-14 より、到達確率の減少幅が大きい連想のうち、「魚」から「海」、「魚」から「つり」、「魚」から「おいしい」は、読前では到達確率の値が、0.15、0.12、0.06 と上位 3 つに入る連想である。つまり、読前に到達確率の高かった連想が、読後には詩の関連語や魚の立場の連想語に分散したために、上記 3 つの連想の到達確率が減少したと考えられる。同様に、到達確率が減少した連想に「船」を出発連想語とする連想、「川」を到達連想語とする連想があるが、前者は想起率が 0.10 減少したことが要因であり、後者に関しては、『大漁』は海の風景を詠ったものであり、海の想起率が 0.06 増加したことに要因があると考えられる。

表 4-14 市街地 (全部) における到達確率表

	出発連想語	到達連想語	増減幅
増加	魚	かわいそう	0.03
		悲しい	0.03
		死ぬ	0.05
		とむらい	0.05
		いわし	0.12
	海	浜	0.02
		いわし	0.03
		とむらい	0.02
	いわし	魚	0.06
		とむらい	0.05
	とむらい	悲しい	0.02
	祭り	楽しい	0.03
	死ぬ	とむらい	0.02
	浜	祭り	0.06
	朝焼け	小焼け	0.04
	-	とむらい	0.14
		魚の立場	0.13
	魚	-	0.22
	海	-	0.13
	いわし	-	0.23
	漁師	-	0.07
減少	魚	海	▲0.04
		つり	▲0.06
		おいしい	▲0.03
	船	-	▲0.11
	-	川	▲0.04

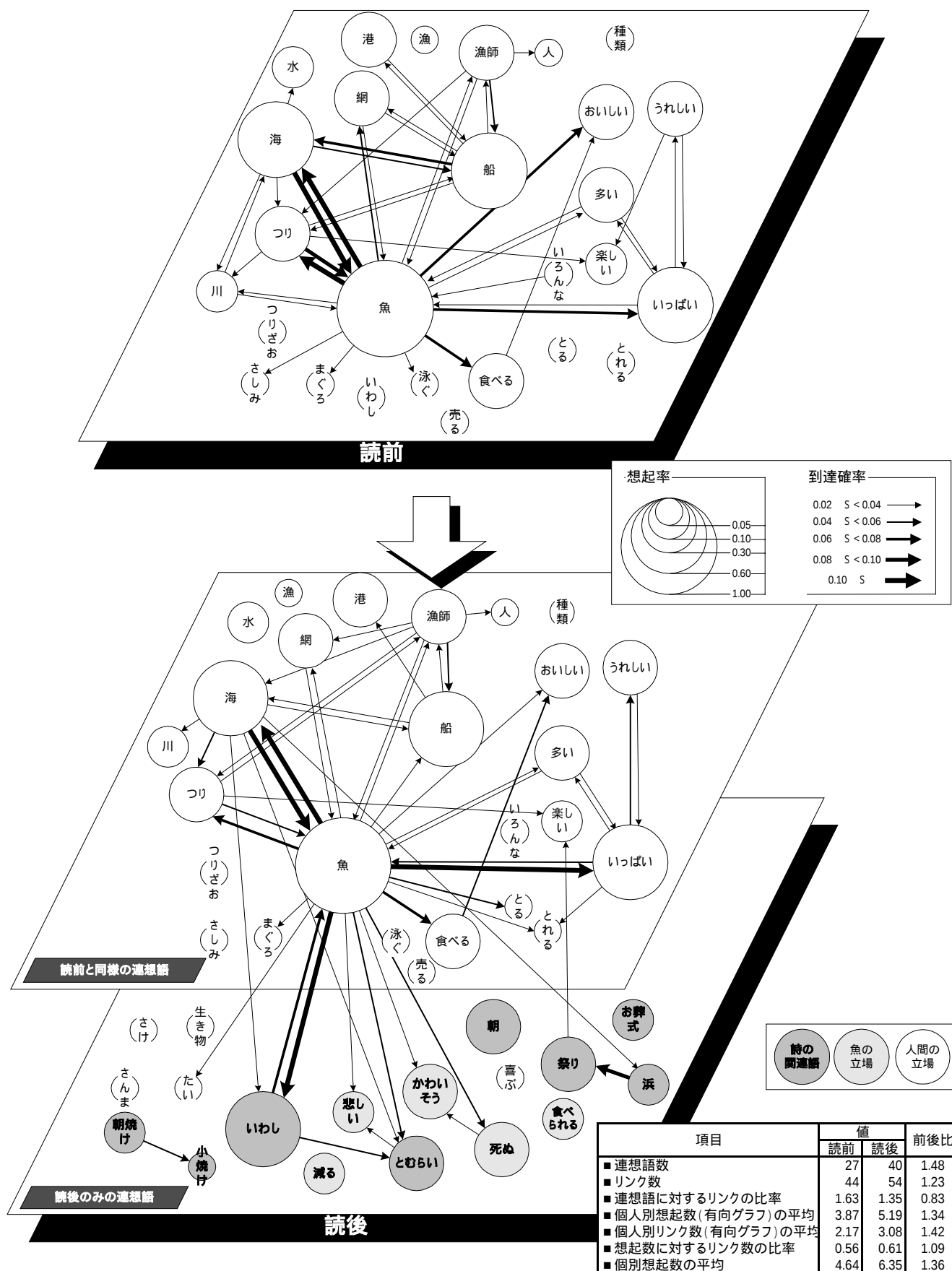


図 4-10 市街地（全部）の児童における『大漁』を読む前後のイメージ構造

■ 詩の後半部を省略して読ませる調査（図 4-11、表 4-15 参照）

表 4-15、図 4-11 のどちらからも読み取れるように、詩の関連語を含んだ連想が多く、省略した『大漁』の影響は大きいと言える。これらの連想における一人当たりの連想数は 0.40 であり、個人別リンク数（有向グラフ）の平均で除すると 0.17 となり、全体の約 17%が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であることが分かる。「浜」から「祭り」が 0.05、「朝焼け」から「小焼け」が 0.06 と高い値であることから詩の影響の大きさが分かる。しかし、『大漁』の後半部を省略しているために、魚の立場による連想は起こっていない。

また、「祭り」から「楽しい」、「浜」から「砂」は 4 つの連想語が全て読後のみに表れている連想語であり、詩の影響で「祭り」、「浜」が想起され、同時に「楽しい」、「砂」が連想されたと考えられる。このような連想は市街地（全部）の調査では起こっておらず、『大漁』の後半部分を省略して読ませたことが影響していると考えられる。つまり、全部の調査では魚の立場で考えるように児童を誘導する結果となったが、省略の調査では、そのように誘導する結果とならなかったために上記のような連想が起こったと考えられる。

全体的には、海からの連想が +0.25 と増加しており、具体的にイメージした児童が多いことが分かる。特に「海」から「魚」が +0.06、「海」から「船」が +0.04、「海」から「浜」が 0.06、「海」から「かもめ」が +0.03 と名詞への連想が多く、知識が活性化したことが分かる。「魚」に関しては、想起率の減少は 0.14 と大きい（魚の種名に分散されたと考えられる）「魚」からの連想はあまり減少しておらず、「魚」から「いわし」、「魚」から「おいしい」などの増加分で打ち消し合ったと考えられる。「食べる」を到達連想語とする連想、「おいしい」を到達連想語とする連想の増加は合計が +0.08 であり、具体的に魚を食べることをイメージした児童も多いと考えられる。また、「船」の想起率の減少に伴って「船」を出発連想語とする連想も 0.06 減少していることが表 4-15 より読み取れる。

表 4-15 市街地（省略）における到達確率表

	出発連想語	到達連想語	増減幅
増加	魚	いわし	0.06
		おおばいわし	0.02
	海	浜	0.06
		魚	0.02
	いわし	海	0.02
		おいしい	0.02
		海	0.03
	浜	砂	0.03
		祭り	0.05
	祭り	楽しい	0.03
	朝焼け	小焼け	0.06
	魚	おいしい	0.04
	海	-	0.25
		魚	0.06
		船	0.04
減少	-	食べる	0.03
		おいしい	0.05
	海	かもめ	0.03
	船	-	▲0.06
	魚	-	▲0.03

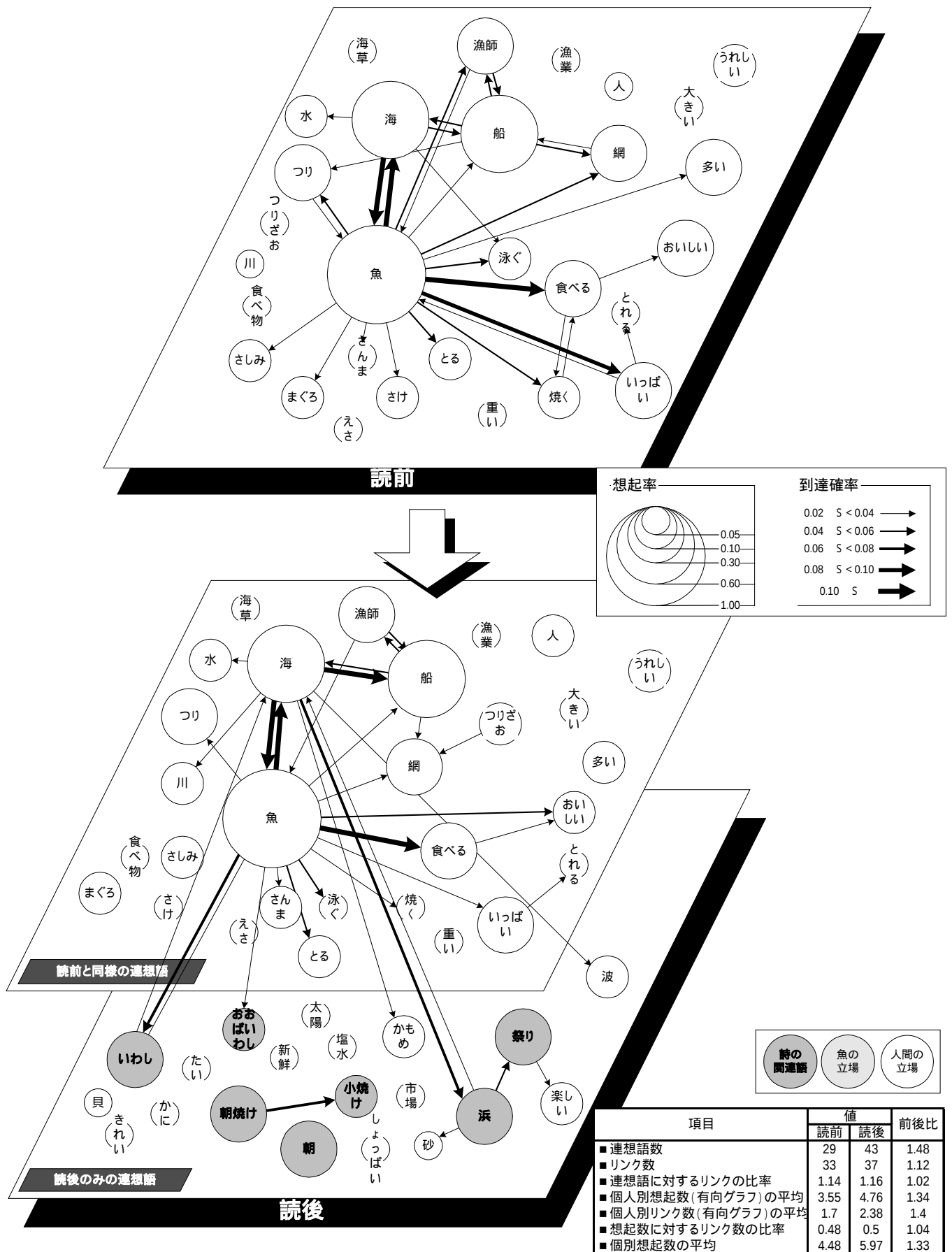


図 4-11 市街地（省略）の児童における『大漁』を読む前後のイメージ構造

(3) 臨海部

■ 詩を全部読ませる調査 (図 4-12、表 4-16 参照)

詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想は、表 4-16 に表れたには 7 つである。これらの連想における一人当たりの連想数は 0.32 であり、個人別リンク数 (有向グラフ) の平均で除すると 0.099 となり、全体の約 10% が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であることが分かる。詩の記述の連想は「朝焼け」から「小焼け」のみであり、「浜」から「祭り」、「いわし」から「とむらい」のような連想は見られない。「とむらい」に関しては有向グラフ上に表れていない。 (「お葬式」は想起されている)

魚の立場の連想は、「魚」から「死ぬ」の連想のみで、『大漁』の後半部分による影響は少ない。これは、著者自身が調査を行ったために、詩の朗読を集中して聞いていない児童がいたり、全体的に児童が調査へ集中できていなかったことが要因だと考えられる。また、「海」から「青い」への連想が +0.05 と大きいのも、これらのことが影響していると考えられる。すなわち、魚の立場の連想が起こるといった連想の広がりよりも、同じ作業を 2 回繰り返したことによって連想が深まった児童が多いと考えられる。

さらに、連想の内容を詳しく見てみると、「夏」から「祭り」、「海水浴」から「夏」、「うれしい」から「夏」のように、夏に関係する実体験をイメージした連想が多いと言える。海からの連想の増加が 0.32 と大きい、「大漁」からは直接連想できない (2 位連想語以降の連想語) 連想の増加による影響が大きいと考えられる。

減少幅の大きい連想が多いことも特徴として挙げられる。特に漁師に関わる連想の減少が目立っている。「夏」から「祭り」、「海水浴」から「夏」、「うれしい」から「夏」の連想と関連付けて考えると、海と漁師の関係以上に、自分と海のことを思い浮かべたことが影響していると考えられる。これらのことから、詩の影響を受けるよりも、同じ実験を 2 回行ったことによって自分の経験等と連想マップ調査を結びつけることによって連想が活性化したと考えることができる。

表 4-16 臨海部 (全部) における到達確率表

	出発連想語	到達連想語	増減幅
増加	魚	いわし	0.11
		死ぬ	0.04
	海	浜	0.07
	いわし	魚	0.02
	朝焼け	小焼け	0.04
	夏	祭り	0.04
	魚	-	0.14
	海	-	0.32
	海	船	0.05
		魚	0.06
		水	0.06
		つり	0.04
		青い	0.05
	船	漁	0.03
	漁師	魚	0.03
	海水浴	夏	0.04
	うれしい	夏	0.03
減少	船	-	▲0.12
	漁師	-	▲0.09
	-	漁師	▲0.10
	魚	いっぱい	▲0.03
		泳ぐ	▲0.03
	船	海	▲0.03
		漁師	▲0.06
		網	▲0.03
	つり	えさ	▲0.03
	漁業	漁師	▲0.04
	まぐろ	さしみ	▲0.03

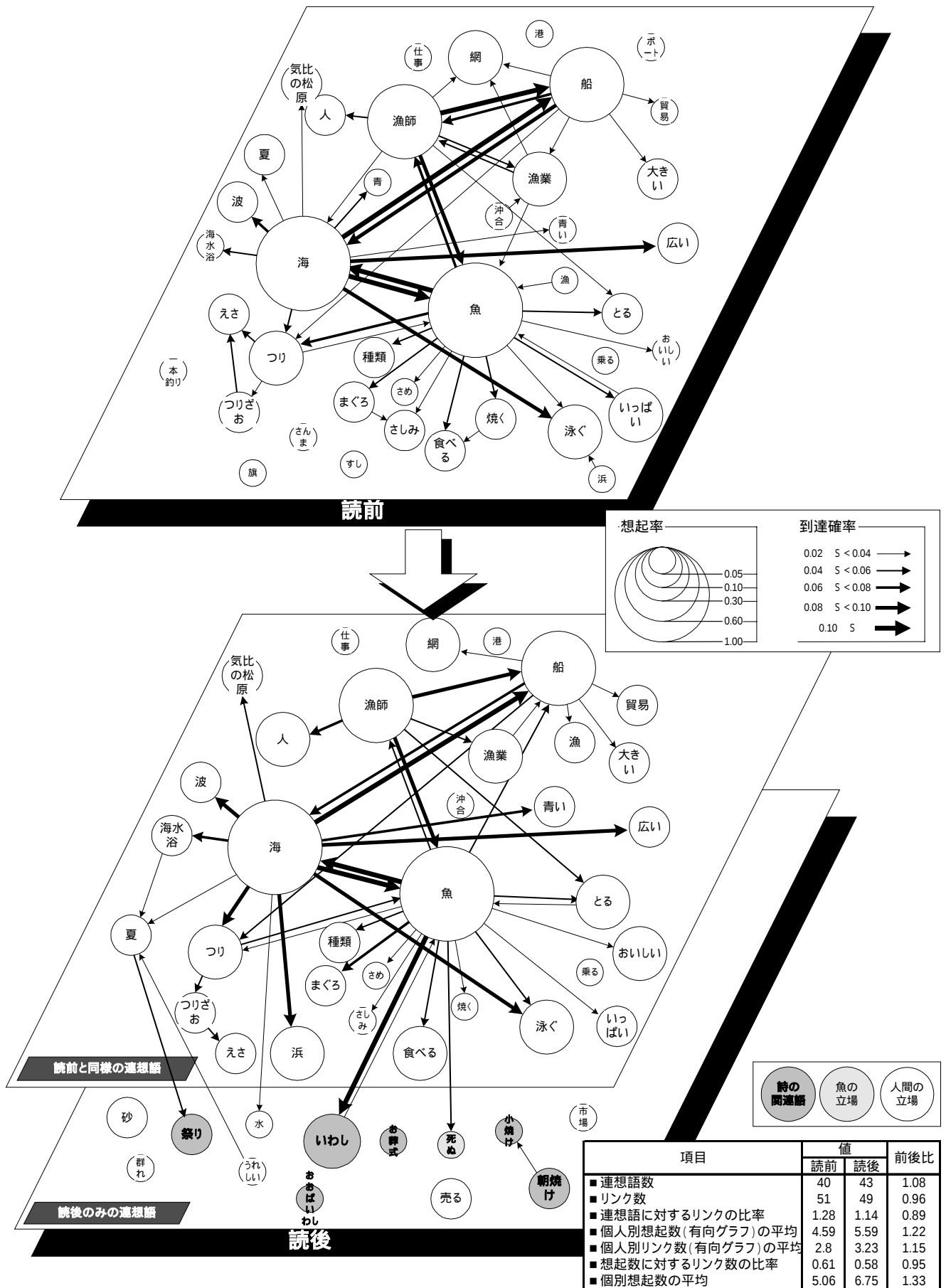


図 4-12 臨海部（全部）の児童における『大漁』を読む前後のイメージ構造

■ 詩の後半部を省略して読ませる調査（図 4-13、表 4-17 参照）

詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想は、表 4-17 に表れたのは 5 つである。これらの連想における一人当たりの想起数は 0.40 であり、個人別リンク数（有向グラフ）の平均で除すると 0.15 となり、全体の 15% が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であることが分かる。詩の記述の連想は「朝焼け」から「小焼け」のみで、0.04 である。それ以外の連想語間の関係については、魚と魚の種名の関係、構成要素（浜は海の構成要素、砂は浜の構成要素）であり、『大漁』を読んでこれらの連想語を“思い出した”と考えられる。「浜」から「砂」に関しては、どちらの連想語も読後においてのみ想起されており、到達確率も 0.10 と高いことから、同時に連想した児童が多いことが分かる。以上のことについて、「海」の想起率が読後には 0.12 増加しており、それに伴って「海」からの連想が増加したことに要因があると考えられる。

全体的な特徴としては、「魚」から「たい」、「魚」から「さんま」、「遠洋」から「漁業」、「沿岸」から「漁業」、「網」から「地引網」のように、読後には連想が具体的になったと言える。また、「海」から「広い」、「海」から「青い」のように連想語間の関係が形状を表す連想が増加していることも読み取れる。

以上のような特徴は、『大漁』の後半部を読まなかったために、魚の立場の連想が起こらなかったことに起因すると考えられる。つまり、後半部を呼んでいないために魚の立場に連想が広がらず、同じ作業を 2 回行っていることなどが影響して連想の内容が具体的になり、深まったと考えられる。

表 4-17 臨海部（省略）における到達確率表

	出発連想語	到達連想語	増減幅
増加	魚	いわし	0.06
	海	浜	0.12
	浜	砂	0.10
	いわし	魚	0.04
	おおばいわし	魚	0.04
	朝焼け	小焼け	0.04
	魚	-	0.24
	海	-	0.32
	魚	海	0.03
		たい	0.03
		さんま	0.04
		焼く	0.03
	海	魚	0.07
		川	0.04
		波	0.04
		夏	0.05
		広い	0.04
		青い	0.03
	船	つり	0.03
	つり	船	0.03
	遠洋	漁業	0.04
	沿岸	漁業	0.04
	網	地引網	0.04
減少	魚	生き物	▲0.03
		つり	▲0.04
	海	水	▲0.04
	漁師	魚	▲0.04

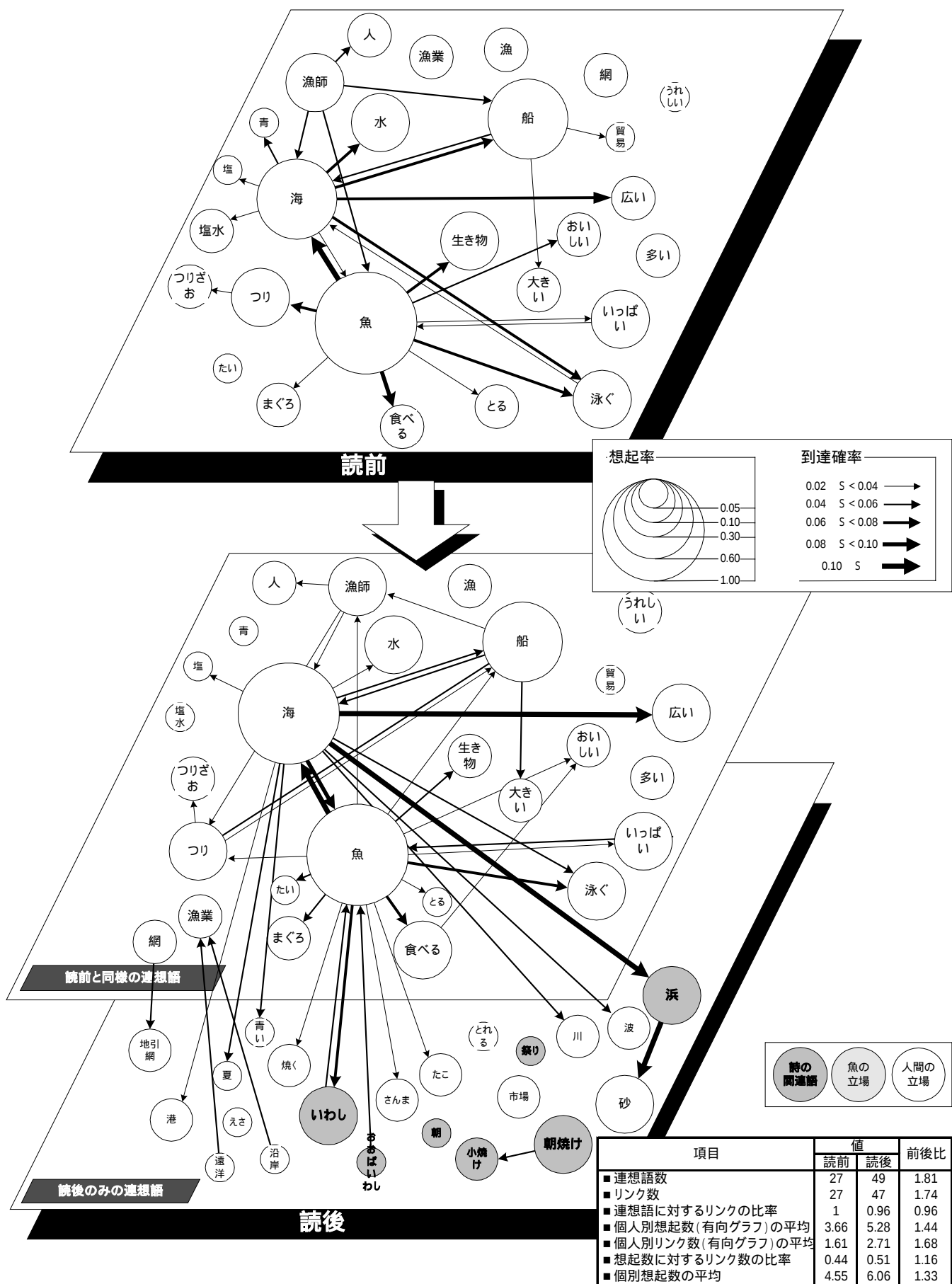


図 4-13 臨海部(省略)の児童における『大漁』を読む前後のイメージ構造

(4) 琵琶湖沿岸部

■ 詩を全部読ませる調査 (図 4-14、表 4-18 参照)

詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想は、表 4-18 には 15 個表れている。これらの連想における一人当たりの想起数は 0.73 であり、個人別リンク数 (有向グラフ) の平均で除すると 0.26 となり、全体の 4 分の 1 以上が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であることが分かる。そのうち、「いわし」から「とむらい」が 0.10、「何万」から「いわし」が 0.04、「浜」から「祭り」が 0.05、「朝焼け」から「小焼け」が 0.03 のように詩の記述の連想が多いことから詩の影響を受けていることが分かる。

また、「魚」から「悲しい」が 0.05、「いわし」から「悲しい」が 0.03 のように魚の立場の連想があることから、詩に感情移入した児童がいることもわかる。これらの連想に対して、「人」から「うれしい」とあることから、大漁の喜びと捕られた魚の悲しみを対比させて連想した児童がいることも分かる。

到達確率の増加幅が大きい連想は、ほとんどが詩の関連語カテゴリーを含む連想であることと、減少した連想が多いことから、全体的に詩の影響を受けており、詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想に分散したと考えられる。

その他、到達確率が増加した連想に、「買う」から「焼く」、「とる」から「売る」があるが、これらのことから、“魚のこれから先”を見届けようとした児童が増加したと考えることができる。

減少している連想に関しては、「魚」の想起率の減少幅が大きいことの影響を受けて、「魚」を含む連想の減少が大きいことが特徴的である。また、「港」、「市場」、「跳ねる」、「広い」は読後には想起されていないために、必然的にこれらの連想語を含む連想も起こっていない。

表 4-18 琵琶湖沿岸部における到達確率表

	出発連想語	到達連想語	増減幅
増加	魚	いわし	0.12
		悲しい	0.05
	海	とむらい	0.03
		とむらい	0.10
	いわし	お葬式	0.04
		海	0.03
		悲しい	0.03
	とむらい	いわし	0.03
	何万	いわし	0.04
	お葬式	悲しい	0.04
	死ぬ	かわいそう	0.05
	浜	祭り	0.05
	祭り	うれしい	0.05
		喜ぶ	0.04
	朝焼け	小焼け	0.03
	人	生き物	0.03
		うれしい	0.03
	買う	焼く	0.03
	とる	売る	0.03
減少	魚	海	▲0.12
		市場	▲0.05
		おいしい	▲0.05
		食べる	▲0.05
		川	▲0.04
		漁師	▲0.03
		港	▲0.03
		焼く	▲0.03
		泳ぐ	▲0.03
		売る	▲0.03
		跳ねる	▲0.03
	海	広い	▲0.05
		泳ぐ	▲0.04
		魚	▲0.03
	漁師	魚	▲0.03
		人	▲0.03
	つり	つりざお	▲0.03
	市場	魚	▲0.03
	鳥	魚	▲0.03
	泳ぐ	人	▲0.03
	●	魚	▲0.10
		海	▲0.11
	魚	●	▲0.29
	漁師	●	▲0.09

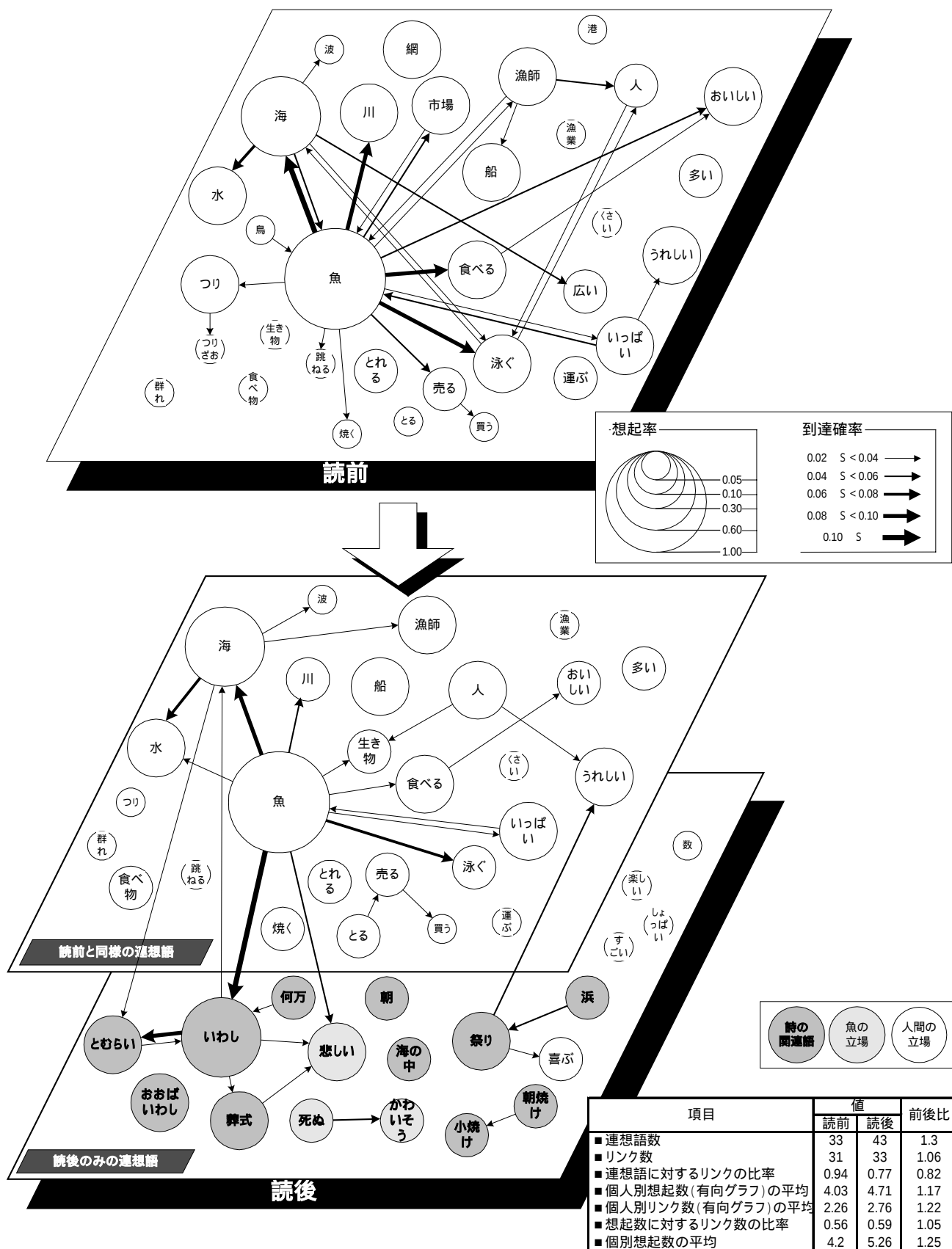


図 4-14 琵琶湖沿岸部（全部）の児童における『大漁』を読む前後のイメージ構造

(5) 各地域のまとめ

表 4-19 は、各地域の有向グラフから見たイメージ変化の特徴をまとめたものである。
表中のセルが網掛けの部分は調査実施者がクラス担任である。

表 4-19 より、全部の調査では、魚の立場の連想語が想起されているが、省略の調査では、魚の立場の連想語が想起されていないことがわかる。また、網掛け部分のクラス担任が実施した調査では、詩の関連語カテゴリーの比率が、著者が実施した調査に比べて高いことがわかる。

表 4-19 各地域の有向グラフから見たイメージ変化のまとめ

	地域 / 調査実施者	魚の立場 の有無	詩の関連語 カテゴリー の比率(%)	特徴
全部	山間部 / 著者	あり	5	・ 魚を食べることをイメージした児童が増加
	市街地 / 担任	あり	20	・ 大漁の喜びと悲しみに関する連想が増加 ・ 読前に到達確率の高かった連想が読後に詩の関連語を含む連想に分散した
	臨海部 / 著者	あり	10	・ 実体験からの連想が増加 ・ 減少幅の大きい連想が多い
	琵琶湖沿岸部 / 担任	あり	26	・ 詩の記述の連想が多い (例.「いわし」→「とむらい」) ・ 大漁の喜びと悲しみに関する連想が増加
省略	山間部 / 著者	なし	7	・ 漁師に対する認識が深まった児童が多い
	市街地 / 担任	なし	17	・ 海を出発連想語とする連想が増加(特に名詞への連想) ・ 魚を食べることをイメージした児童が増加
	臨海部 / 著者	なし	15	・ 具体的な連想が増加(連想語間の関係が形状、構成要素、例示など)

（６）山間部と臨海部に関する比較

山間部と臨海部の小学校は著者自ら出向いて調査を行った地域であり、その点において条件が同じであるので比較対象としている。表 4-20 は、山間部と臨海部における有向グラフ全体についての解釈項目と値の表である。図 4-15 は、山間部と臨海部（全部）に関して、読後の連想マップ調査における有向グラフから、特定の連想語を抜き出して作成した有向グラフである（3-6 有向グラフの解釈で述べた通り）。

まず、山間部と臨海部それぞれについて全部と省略で有向グラフ全体解釈表を比較・考察を行う。その後、山間部と臨海部の全部の調査で比較・考察を行う。

■ 山間部の全部と省略の比較

表 4-20 の山間部の有向グラフ全体の解釈表より、山間部の全部と省略では、【連想語数】は同じであるが、【リンク数】、【個人別想起数（有向グラフ）の平均】、【個人別リンク数（有向グラフ）の平均】に関しては全部の調査の方が、読前、読後とも低い値であることがわかる。これは、山間部の全部の調査のサンプル数が４年生側に偏っており、全体的に想起が少なくなったことが原因だと考えられる。前後比に関しては【リンク数】（【連想語に対するリンクの比率】）は省略の方が高く、【個人別想起数（有向グラフ）の平均】、【個人別リンク数（有向グラフ）の平均】（【個人別想起数に対する個人別リンク数の比率】）では、全部の方が高いことが読み取れる。つまり、【個人別想起数（有向グラフ）の平均】、【個人別リンク数（有向グラフ）の平均】（【個人別想起数に対する個人別リンク数の比率】）のような量的な指標から見れば、全部の調査の方が、大漁イメージのつながりが深まっていると言える。山間部に関しては、著者が調査を実施したため、『大漁』の影響が少なく、読後に詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想も少なく、連想が詩の関連語に大きく分散するような結果にはなっていない。つまり、全部の調査において、量的には大漁イメージが深まったという結果が出ているが、これは『大漁』の後半部による影響ではなく、サンプル数の偏り等、他に原因があると考えられる。

また、全部の調査では詩の記述の連想が見られたが、省略の調査では詩の記述の連想が見られなかったという結果が出ていることから、省略の調査では、読後にほとんど詩の印象が残らなかったと考えられる。

■ 臨海部の全部と省略の比較

表 4-20 の臨海部の有向グラフ全体の解釈表より、読前において全部と省略での値の差が大きいことが読み取れる。臨海部においてはサンプル数の隔たりはほとんどないが、西小学校の５年生では、省略の調査の方が全部の調査よりも１以上平均想起数が少ないという結果が出ている。この結果が影響して臨海部全体としての有向グラフにも全部と省略で差が出たと考えられる。そのため、【個別想起数の平均】の同値を除いて、省略の調査の方が前後比の値が高くなっている。

表 4-20 山間部、臨海部における有向グラフの全体解釈表

	項目	全部			省略		
		値		前後比	値		前後比
		読前	読後		読前	読後	
山間部	■ 連想語数	23	43	1.87	23	43	1.87
	■ リンク数	19	31	1.63	24	49	2.09
	■ 連想語に対するリンクの比率	0.83	0.72	0.87	1.04	1.14	1.1
	■ 個人別想起数(有向グラフ)の平均	2.43	3.84	1.58	3.57	4.83	1.35
	■ 個人別リンク数(有向グラフ)の平均	0.88	1.95	2.22	1.42	2.4	1.69
	■ 想起数に対するリンク数の比率	0.36	0.51	1.42	0.4	0.5	1.25
	■ 個別想起数の平均	3.18	4.79	1.51	4.16	5.67	1.36
臨海部	項目	値		前後比	値		前後比
		読前	読後		読前	読後	
	■ 連想語数	40	43	1.08	27	49	1.81
	■ リンク数	51	49	0.96	27	47	1.74
	■ 連想語に対するリンクの比率	1.28	1.14	0.89	1	0.96	0.96
	■ 個人別想起数(有向グラフ)の平均	4.59	5.59	1.22	3.66	5.28	1.44
	■ 個人別リンク数(有向グラフ)の平均	2.8	3.23	1.15	1.61	2.71	1.68
	■ 想起数に対するリンク数の比率	0.61	0.58	0.95	0.44	0.51	1.16
	■ 個別想起数の平均	5.06	6.75	1.33	4.55	6.06	1.33

■ 山間部（全部）と臨海部（全部）の比較（図 4-15 参照）

山間部に関しては、全体の約 5% が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であり、臨海部に関しては約 10% であることから、全体的には臨海部の児童の方が詩の影響が大きいと言える。

次に、個々の連想の地域による違いを考察する。図 4-15 より、「海」から「浜」への連想は臨海部には 0.07 で山間部は 0.02 であることから差が大きいと言える。想起率の違いからも分かるように、臨海部の児童は海に対するイメージが山間部より強いことから、「浜」への連想も高いと言える。しかし、詩の記述にある「浜」から「祭り」への連想は臨海部にはなく、山間部は 0.02 である。魚の立場：動詞に関しては、「魚」から「死ぬ」への連想は、山間部では有向グラフ上には表れなかったが、臨海部では到達確率が 0.04 である。以上のことから、人間以外の立場に立ってみるといような、『大漁』の後半部の影響に関しては、大漁に関するイメージ量が多い程受けやすいと考えることができる。すなわち、『大漁』を読んで認識を深めるためには、『大漁』に詠まれた風景を具体的にイメージすることが必要である。

また、読後の連想内容の違いとして、山間部は食生活に関する連想（例、「食べる」→「おいしい」）が増加しているが、臨海部では食生活に関する連想の増加は少なく、遊び体験に関する連想（例、「海水浴」→「夏」）が増加している。表 4-21、表 4-22 は、『大漁』を読む前後における到達確率の増減が 0.03 以上の連想の中から、食生活と遊び体験に関する連想を抽出して作成した表であり、臨海部と山間部の値の差が読み取れる。環境イメージの形成のためには、食生活に関する連想のみの偏った連想よりも、多種多様な連想ができるなければならないと考える。臨海部の児童に関しては、食生活だけでなく、遊び体験にも連想を広げていることから、さらに連想を広げることができれば、環境イメージ形成につながると考える。

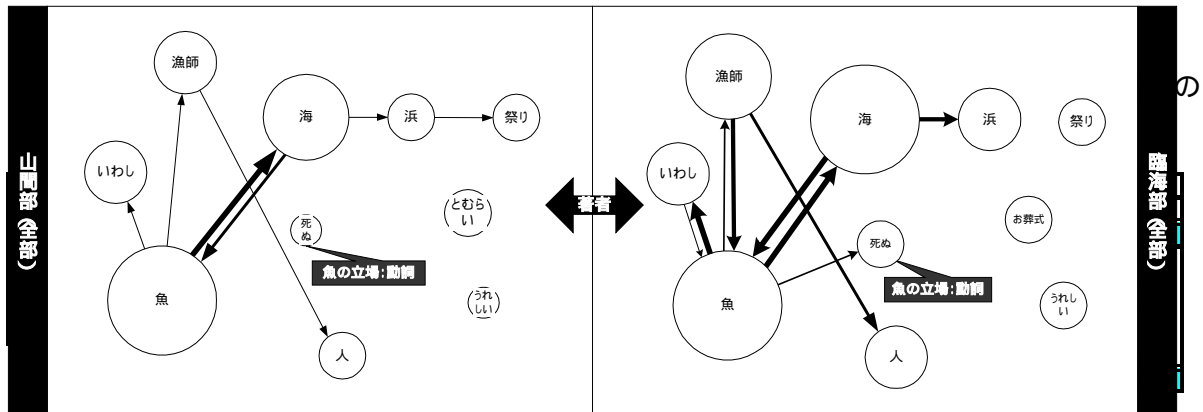


図 4-15 特定連想語を抽出した読後有向グラフ（左図：山間部、右図：臨海部）

（ 7 ）市街地と琵琶湖沿岸部に関する比較

市街地と琵琶湖沿岸部はクラス担任に調査をお願いした地域であり、その点において条件が同じであるので比較対象とする。表 4-23 は、市街地、琵琶湖沿岸部に関する有向グラフ全体についての解釈項目と値の表である。図 4-16 は、市街地と琵琶湖沿岸部の全部の調査における有向グラフから、特定の連想語を抜き出して作成した読後有向グラフである。（ 3-6 有向グラフの解釈で述べた通りである。）

■ 市街地の全部と省略の比較

表 4-23 の市街地の有向グラフ全体の解釈表より、【連想語に対するリンクの比率】、【想起率に対するリンクの比率】の前後の値から、全部の調査の方が大漁イメージのつながりが深いことが読み取れる。しかし、前後比で見れば値は全部と省略であまり変わらないと言える。

表 4-23 市街地、琵琶湖沿岸部における有向グラフの全体解釈表

	項目	全部			省略		
		値		前後比	値		前後比
		読前	読後		読前	読後	
市街地	■ 連想語数	40	43	1.08	27	49	1.81
	■ リンク数	51	49	0.96	27	47	1.74
	■ 連想語に対するリンクの比率	1.28	1.14	0.89	1	0.96	0.96
	■ 個人別想起数(有向グラフ)の平均	4.59	5.59	1.22	3.66	5.28	1.44
	■ 個人別リンク数(有向グラフ)の平均	2.8	3.23	1.15	1.61	2.71	1.68
	■ 想起数に対するリンク数の比率	0.61	0.58	0.95	0.44	0.51	1.16
	■ 個別想起数の平均	5.06	6.75	1.33	4.55	6.06	1.33
琵琶湖沿岸部	項目	値		前後比	値		前後比
		読前	読後		読前	読後	
	■ 連想語数	33	43	1.3	-	-	-
	■ リンク数	31	33	1.06	-	-	-
	■ 連想語に対するリンクの比率	0.94	0.77	0.82	-	-	-
	■ 個人別想起数(有向グラフ)の平均	4.03	4.71	1.17	-	-	-
	■ 個人別リンク数(有向グラフ)の平均	2.26	2.76	1.22	-	-	-
	■ 想起数に対するリンク数の比率	0.56	0.59	1.05	-	-	-
	■ 個別想起数の平均	4.2	5.26	1.25	-	-	-

■ 市街地（全部）と琵琶湖沿岸部（全部）の比較（図 4-16 参照）

市街地に関しては、全体の約 12% が詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想であり、琵琶湖沿岸部では 26% であることから、全体的には琵琶湖沿岸部の児童の方が詩の影響が大きいと言える。

さらに、図 4-16 の有向グラフ上の連想語において、魚の立場：形容詞・形容動詞、魚の立場：動詞、お葬式・とむらいの 3 つのカテゴリーを到達連想語とする連想の割合を求めたところ図 4-17 のようになった。全体としては、琵琶湖沿岸部の値が若干高くなっていることが分かる。「魚の立場：形容詞・形容動詞」と「お葬式・とむらい」のカテゴリーへの連想においては、琵琶湖沿岸部の割合が市街地より高いことが読み取れる。「魚の立場：動詞」への連想においては、琵琶湖沿岸部では 0.000 であり、市街地は 0.039 である。また、図 4-16 より、魚の立場：動詞カテゴリーの連想語として、市街地では「食べられる」「減る」「死ぬ」が想起されているが、臨海部では「死ぬ」のみであり、市街地の方が多様であることがわかる。「お葬式」や「とむらい」は詩の言葉の直接的な連想であり、「魚の立場：形容詞・形容動詞」「魚の立場：動詞」に当たる連想語は、『大漁』の後半部の影響を受けて、魚の立場で思い浮かべた連想語であるので、「魚の立場：形容詞・形容動詞」「魚の立場：動詞」に当たる連想語の方が、詩の言葉の直接的な連想よりも認識が深まったと捉えることができる。

以上のことから考えると、琵琶湖沿岸部の児童は詩の影響を直接的には多く受けたことに対して、市街地の児童は、人間だけでなく、魚の立場でも考え、認識が深まった児童が多いということが言える。

次に、個々の連想の考察に移る。

表 4-24 は市街地、琵琶湖沿岸部に関して、図 4-16 の特定連想語有向グラフの中でも、特に『大漁』の影響を受けたかどうかに関連すると思われる、魚の立場：形容詞・形容動詞、魚の立場：動詞、お葬式・とむらいの 3 つの連想語を含む連想を抽出した到達確率表である。

特に値が大きい連想は、琵琶湖沿岸部の「いわし」から「お葬式・とむらい」で 0.14 である。市街地のそれは 0.06 である。琵琶湖沿岸部ではサンプル数が少なく、数値での比較は考慮しなければならぬが、差は歴然であり、琵琶湖沿岸部では直接的な連想が多いことがこの連想から分かる。「魚」を出発連想語とする連想の合計は、市街地では 0.18、琵琶湖沿岸部では 0.05 と差が大きく、想起率の違い（市街地：0.78、琵琶湖沿岸部：0.60）が要因だと考えられるが、琵琶湖沿岸部の「いわし」から「お葬式・とむらい」の値が大きいことにも一つの原因があると思われる。

図 4-16 より、琵琶湖沿岸部のみに存在する連想として「人」から「喜ぶ・うれしい」が 0.03、「喜ぶ・うれしい」から「祭り」が 0.07、「祭り」から「喜ぶ・うれしい」が 0.09 である。『大漁』は詩の前半部分で大漁の喜びを詠っており、後半部分と対比させた記述であることから以上のような連想が起こったと考えられる。以上の点から見れば、琵琶湖沿

岸部には大漁の喜びと悲しみを対比させた児童がいることが分かる。

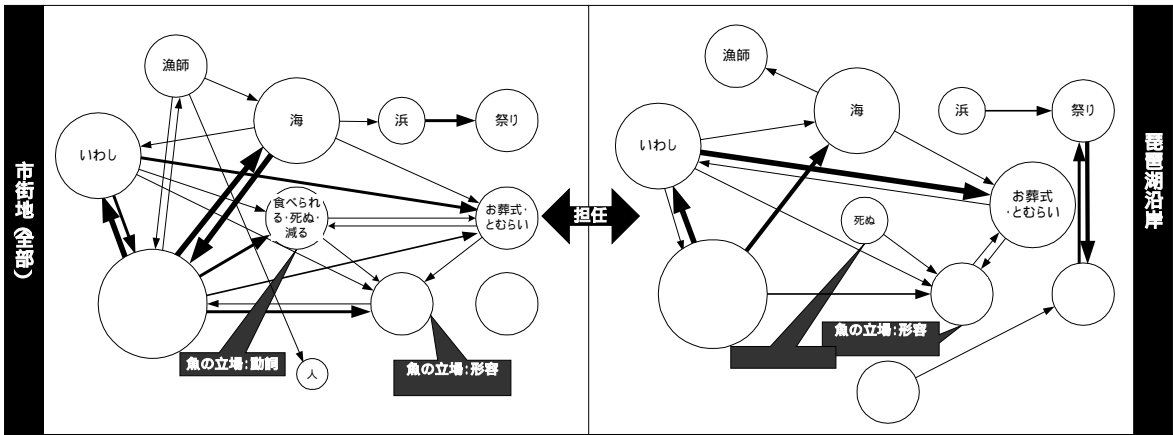


図 4-16 特定連想語を抽出した読後有向グラフ（左図：市街地、右図：琵琶湖沿岸部）

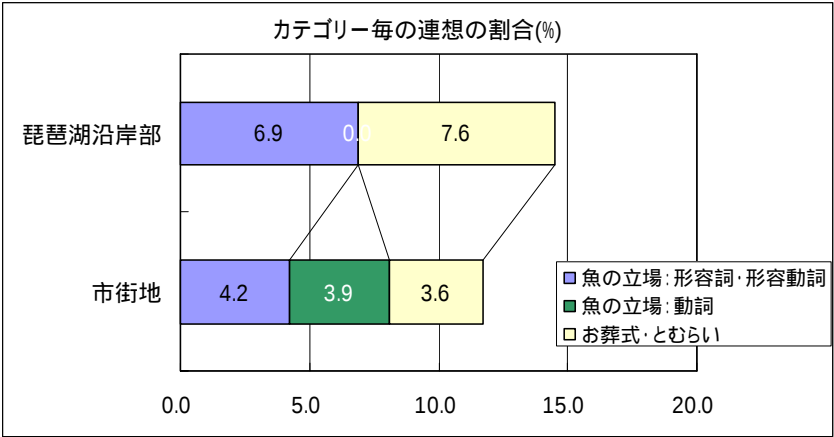


図 4-17 各カテゴリーを到達連想語とする連想の割合（市街地、琵琶湖沿岸部）

表 4-24 特定連想語の読後有向グラフより抽出した到達確率表（市街地、琵琶湖沿岸部）

出発連想語	到達連想語	到達確率	
		市街地	琵琶湖沿岸部
魚	お葬式・とむらい	0.05	
	魚の立場:形容詞・形容動詞	0.06	0.05
	魚の立場:動詞	0.07	
海	お葬式・とむらい		0.03
いわし	お葬式・とむらい	0.06	0.14
	魚の立場:形容詞・形容動詞	0.02	0.03
	魚の立場:動詞	0.03	
魚の立場:動詞	魚の立場:形容詞・形容動詞	0.02	0.05
魚の立場:形容詞・形容動詞	魚	0.02	
	お葬式・とむらい		0.04
お葬式・とむらい	魚の立場:形容詞・形容動詞	0.03	0.06
	魚の立場:動詞	0.02	

4-2-4 詩の関連語カテゴリーの割合による考察

本項では、全部の調査において、詩の関連語カテゴリーの連想語の想起と、連想の割合によって考察する。

(1) 調査実施者による違い

調査実施者の違いから『大漁』の影響の違いを考察する。

全体的な傾向として、著者が調査を行った山間部、臨海部の児童には、『大漁』の影響が想起率や有向グラフにはほとんど表れなかった。一方、クラス担任に調査をお願いした小学校では、山間部、臨海部以上に『大漁』の影響が表れた。

表 4-25 は、全ての連想語の想起に対して、詩の関連語カテゴリーが想起された割合を表しており、表 4-26 は、全ての連想に対して、詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想が起こった割合を表している。表 4-25、表 4-26 より調査実施者による値の差が読み取れる。これらの結果の違いは、著者自身が調査を実施した際に、詩の朗読をきちんと聞いていないと思われる児童がいたことや、詩を児童自身が読み直すときにきちんと読んでいない児童がいたことに関係があると考えられる。逆に、クラス担任が実施した市街地、琵琶湖沿岸部の児童は調査自体に集中できる環境であったために、『大漁』の効果が表れたと考えられる。また、クラス担任が「詩を読んでどのように感じたか」などの言葉かけが行われたことによる影響も考えられる。

表 4-25 詩の関連語カテゴリーの連想語の割合

調査実施者	▼地域名	▼全部	▼省略
■ 著者自身	山間部	13%	9%
	臨海部	9%	12%
■ クラス担任	市街地	19%	21%
	琵琶湖沿岸部	31%	-

表 4-26 詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想の割合

調査実施者	▼地域名	▼全部	▼省略
■ 著者自身	山間部	5%	7%
	臨海部	10%	15%
■ クラス担任	市街地	20%	17%
	琵琶湖沿岸部	26%	-

(2) 地域性による違い

地域性による『大漁』の影響の違いに関して、山間部と臨海部の調査で考察する。

表 4-25 の詩の関連語カテゴリーの連想語の割合では、全部の調査では山間部が臨海部よりも値が高く、省略の調査では臨海部の方が山間部より高くなっている。大漁イメージの個人別想起数（有向グラフ）の平均に関しては、地域性による影響が表れたが、詩の関連語カテゴリーに関しては、地域性の影響を受けていないことが読み取れる。しかし、表 4-26 の詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想では、全部、省略のどちらの調査においても臨海部の方が山間部よりも高い値である。以上のことから、全体として見た場合に、『大漁』の影響は想起の段階では地域性は出ないが、想起された連想語を出発連想語として、到達連想語を連想する際に地域性による影響が出ると読み取ることができる。つまり、詩の関連語カテゴリーの連想語が、他の言葉とつながりを持つためには、大漁のイメージ量が影響すると考えられる。例えば、『大漁』の影響を受けて、「浜」という連想語を想起したとする。「浜」を出発連想語として次に「砂」という到達連想語が想起されるためには、海に関するイメージが必要である。山間部の児童は、海に関するイメージ量が少ないために、「浜」から「砂」のような連想が少なく、表 4-26 のように、臨海部よりも値が小さいという結果になったと考えられる。

4-3 イメージ変化分析のまとめ

4-1 では、連想マップ調査のサンプリング結果とその問題点について述べた。4-2 では、サンプリングの問題点を考慮に入れた上で、想起率の増減、到達確率の増減から大漁イメージの変化を考察した。調査実施者が著者である山間部と臨海部では『大漁』の影響が少なかった。クラス担任が調査を実施した市街地と琵琶湖沿岸部では、山間部や臨海部よりも『大漁』の影響が大きかった。また、全部と省略の調査の違いは、全部の調査では魚の立場による連想語が想起されたが、省略の調査では想起されなかった。また、4-2-4 では詩の関連語カテゴリーに関する連想語の想起、連想の割合について、地域別に表を作成し、調査実施者の違い・地域性による違いから考察した。

さらに、全部の調査における地域間の連想傾向を比較するために、表 4-26 詩の関連語カテゴリーの連想語を含む連想の割合を縦軸、魚の立場、自分の立場による連想の割合を横軸として、各地域の連想傾向をプロットした図を作成した（図 4-19 参照）。

図 4-19 より、琵琶湖沿岸部の児童は、詩の関連語を含む連想の割合が最も高く、『大漁』の影響が最も大きいことが分かる。市街地、臨海部、山間部と続くことから、詩の関連語を含む連想の割合に関して影響を与える要因として最も大きいのが調査実施者の違いであり、続いて児童の居住地域であると考えられる。

また、図 4-19 の横軸である魚の立場の連想に関しても、高い順に、1) 市街地、2) 琵琶湖沿岸部、3) 臨海部、4) 山間部であることから、調査実施者の違いが最も大きな

要因であると考えられる。縦軸の詩の関連語を含む連想の割合の順序と違って、魚の立場の連想は市街地が最も割合が高い。これは、4-2-2 想起率の増減から見た大漁イメージの変化（7）市街地と琵琶湖沿岸部の比較で述べたように、サンプル数の隔たりが要因だと考えられる。市街地のサンプルは4年生に偏っているために、形容詞・形容動詞、動詞の連想が増え、魚の立場である「かわいそう」や「悲しい」などが連想されたと考えられる。

詩の関連語を含む連想以外の特徴として、山間部では食生活に関する連想が増加し、臨海部では、遊び体験に関する連想が増加した。また、魚の立場の連想の割合に関しても、臨海部の方が山間部よりも高くなっているが、これらが地域性による影響だと考えられることは上述した。つまり、『大漁』の影響は児童の居住地の違いからも表れることが山間部と臨海部の結果からわかる。

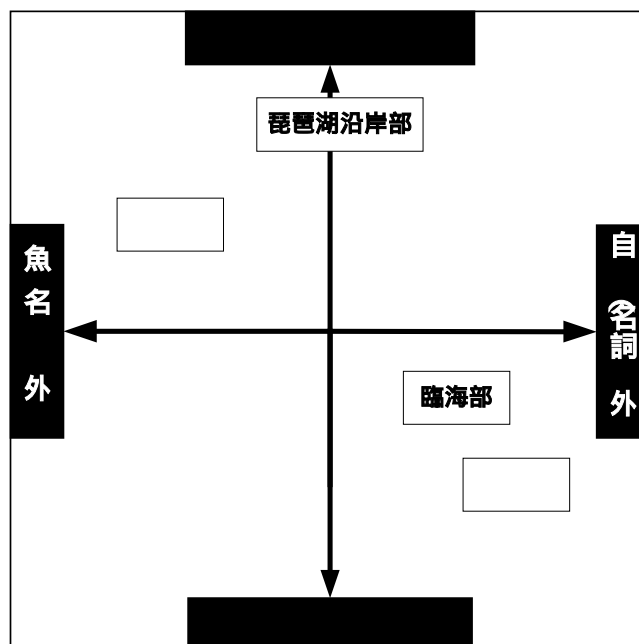


図 4-19 自分 - 魚、詩の関連語を含む - 含まないを軸とした各地域の連想傾向のプロット

4-4 個別サンプルの考察

前節までは、集団による傾向を見てきたが、本節では、全部の調査において『大漁』の影響が顕著だった児童について個別に考察する。抽出基準は 3-7 個別サンプルの抽出と考察で述べたとおりである。

有向グラフは集団のイメージ構造を表すものであるが、本研究の調査で用いた連想マップは個人のイメージ構造を把握するものである。個別に考察することで、集団には表れなかったが、『大漁』の後半部分の影響を受けた連想語や、連想のつながりを把握することができる。また、同じ連想マップを書いた児童がほとんどいない程、個人の特性が表れる連想マップを考察することは、『大漁』のイメージ形成効果を把握する上でも重要であると考ええる。

(1) 臨海部（松原小 5 年生女子）のサンプルより

図 4-23 の臨海部（松原小 5 年生女子）のサンプルでは、読後に「いただきます」「命」「海の命」に見られるように、感謝の気持ちから連想したと考えられる連想語が想起されているのが特徴的である。読前には「魚」からは「海」、「食事」と連想しているが、読後には魚を「海の生き物」としても連想していることがわかる。さらに、魚にも命があることの認識を表したと考えられる「海の命」という連想語に連想が続いている。また、「いただきます」に関しては、“人間は他の生き物を食べなければ生きていけない、だからこそ感謝して食べなければならない”ということを認識（再認識）して想起された連想語であると考えられる。詩の関連語は「いわし」の一語のみだが、『大漁』を読むことによって、認識が深まっていることがわかる。

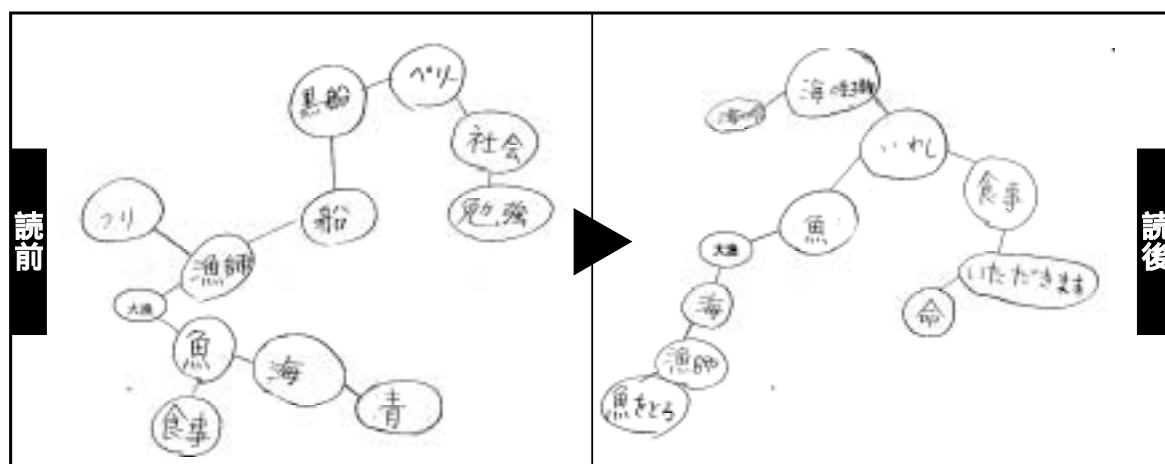


図 4-20 臨海部（松原小 5 年生女子）のサンプル

(2) 市街地（城西小4年生男子）のサンプルより

図4-24の市街地（城西小4年生男子）のサンプルでは、「食べられる」、「かわいそう」の想起が特徴的である。読後には、食べられる魚の視点で考えていることがわかる。

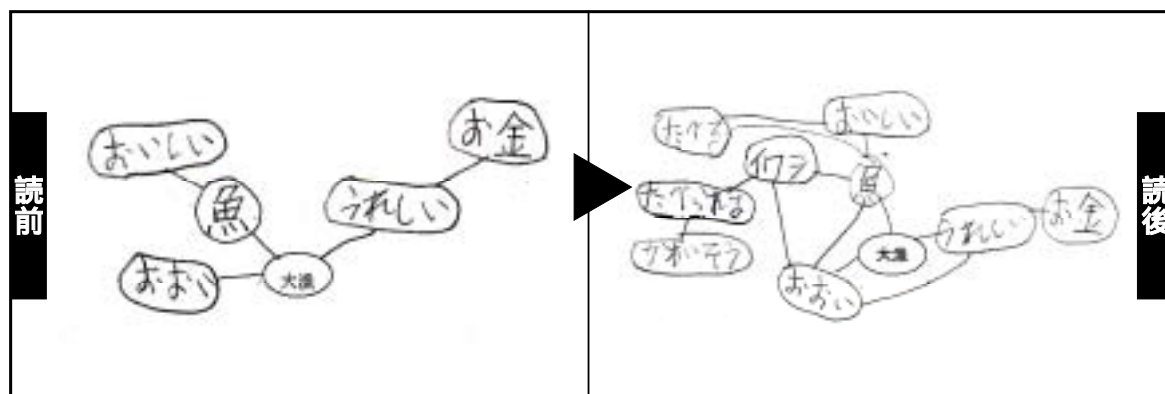


図4-21 市街地（城西小4年生男子）のサンプル

(3) 市街地（佐和山小5年生男子）のサンプルより

図4-25の市街地（佐和山小5年生男子）のサンプルでも、「魚」→「死ぬ」→「食べられる」→「かわいそう」という連想が特徴的である。読前には、「食べる」から「おいしい」と連想しているが、読後には「食べられる」と視点が逆転し、「かわいそう」と連想している。図4-24でも「食べられる」から「かわいそう」が連想されていることから、「かわいそう」という魚の立場にたった連想語は、「食べられる」という動詞の連想語があったからこそ、連想されたと考えることができる。

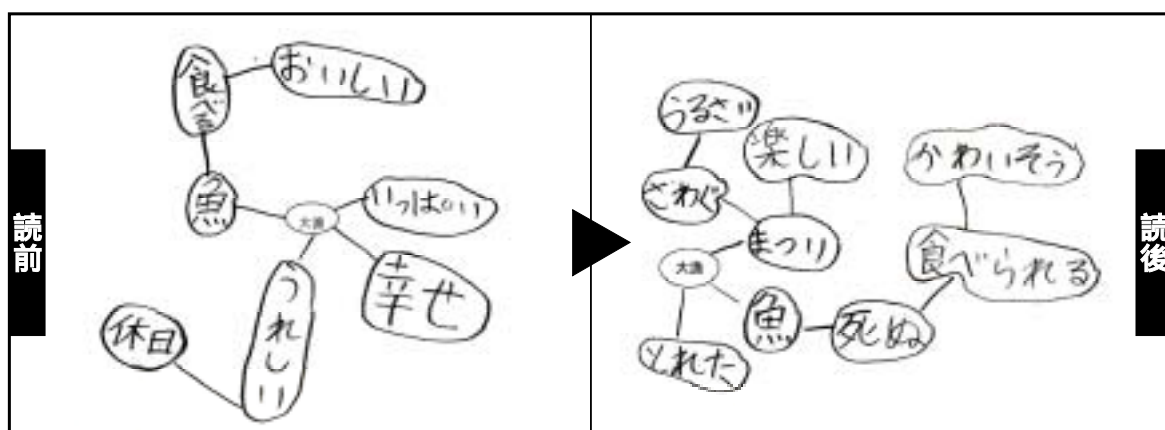


図4-22 市街地（佐和山小5年生男子）のサンプル

(4) 市街地（平田小5年生女子）のサンプルより

図4-26の市街地（平田小5年生女子）のサンプルでは、「船の上」という連想語が特徴的である。『大漁』の“海の中”という記述を読んだことによって、「船」という連想語から「船の上」と連想したと考えられる。サンプルでは、「船の上」からは何も連想していないが、船の上では何が起こっていたか思い浮かべて連想して欲しかったところである。

「いわし」から「減っていく」と魚の視点での連想も見られる。

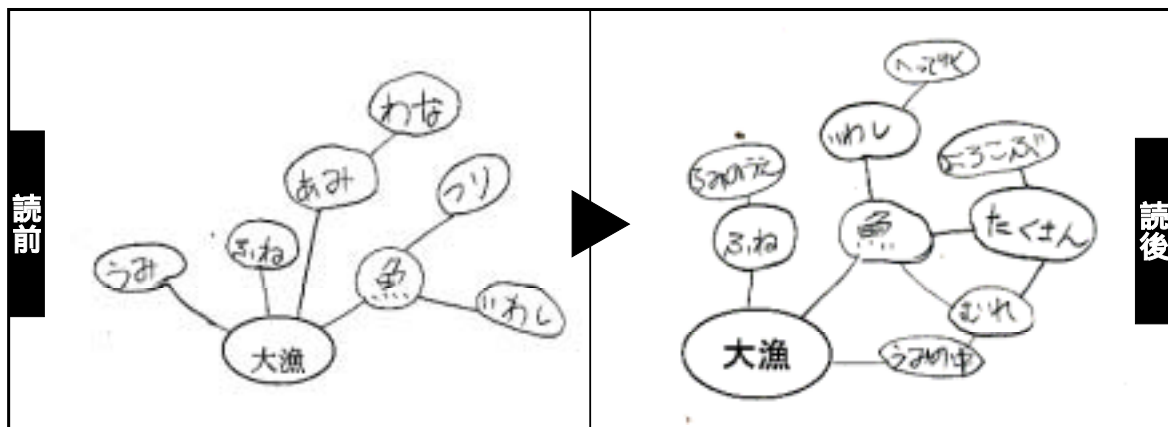


図4-23 市街地（平田小5年生女子）のサンプル

(5) 図4-27の臨海部（松原小6年生男子）のサンプルより

図4-27の臨海部（松原小6年生男子）のサンプルでは、図4-23の臨海部（松原小5年生女子のサンプル）と同様に「海の命」という連想語が想起されている。詩の連想語の直接的な連想ではなく、「海の命」のような『大漁』を読んで“魚にも命がある”という認識は、臨海部の児童に少し見られた。（想起率は低く、有向グラフには表れなかった）

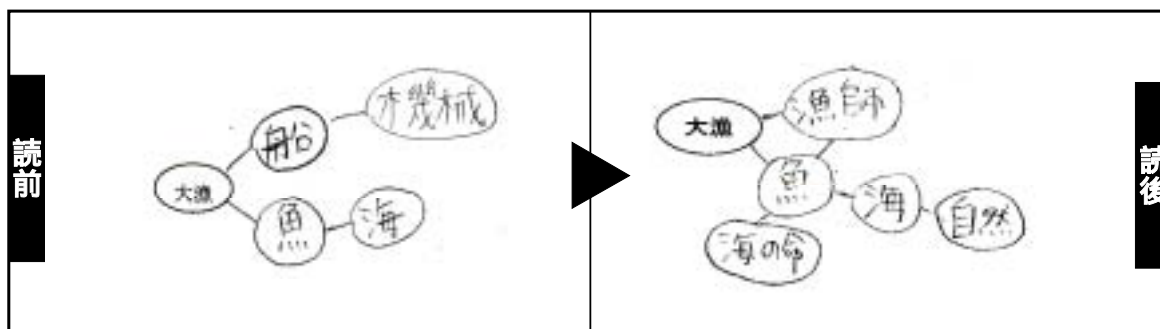


図4-24 臨海部（松原小6年生男子）のサンプル

(6) 図 4-28 山間部(日栄小4年生男子)のサンプルより

図 4-28 山間部(日栄小4年生男子)のサンプルでは、読後には連想語が一語変わっただけである。しかし、最後の一語が「死ぬ」という連想語であり、「人間の視点の動詞」から「魚の視点の動詞」の連想のように、視点の逆転が容易に読み取ることができる。

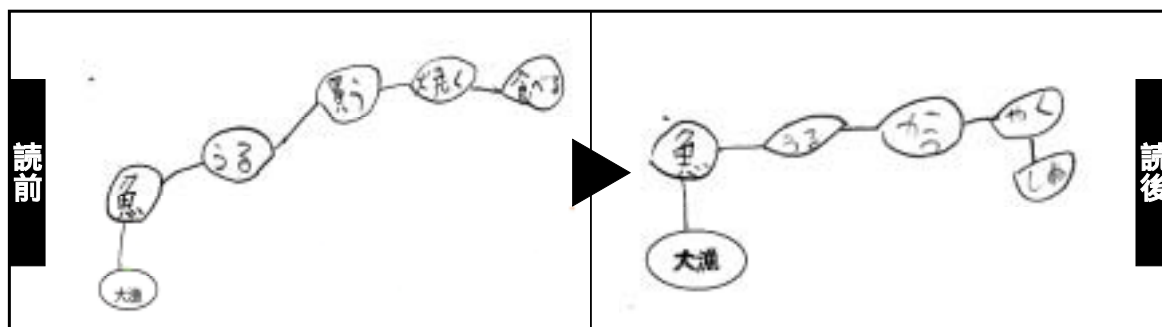


図 4-25 山間部(日栄小4年生男子)のサンプル

(7) 図 4-29 山間部(日栄小5年生女子)のサンプルより

調査では、『大漁』の作者である金子みすゞの名前は全て終わった後で児童に言っている。つまり、図 4-29 山間部(日栄小5年生女子)のサンプルは、『大漁』を以前に読んで知っている児童である。魚の視点の動詞や魚の立場の形容詞・形容動詞はないが、「喜んでる漁師」と、「見学してる?人」と両者を対比させて考えていることが読み取れる。

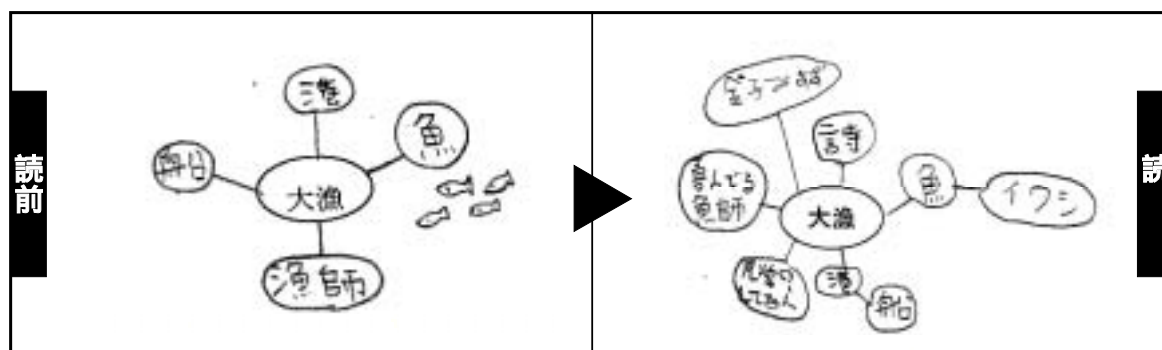


図 4-26 山間部(日栄小5年生女子)のサンプル

(8) 図 4-30 山間部(多賀小4年生男子のサンプル)より

第二章 連想マップ調査の概要でも述べた通り、多賀小学校の全部の調査に限って、10日後に連想マップ調査を実施しており、その結果も考察に加える。

図 4-30 山間部(多賀小4年生男子のサンプル)では、読後に魚の視点の動詞である「死ぬ」が想起されている。ところが、10日後には「死ぬ」は表れていない。「大漁」という刺激語から『大漁』の詩が思い浮かばなかったことがわかる。

(9) 図 4-31 山間部 (多賀小 4 年生女子のサンプル) より

図 4-31 山間部 (多賀小 4 年生女子のサンプル) では、魚の視点の動詞や魚の立場の形容詞・形容動詞は表れていないが、考察を行う。

読後に、「朝方」という連想語が想起されているが、『大漁』が朝の風景を詠っていることが影響したと考える。さらに 10 日後にも、「朝」という連想語が想起されていることから、この児童は『大漁』を読むことで、漁師が朝早いというイメージは形成されたと考えられる。

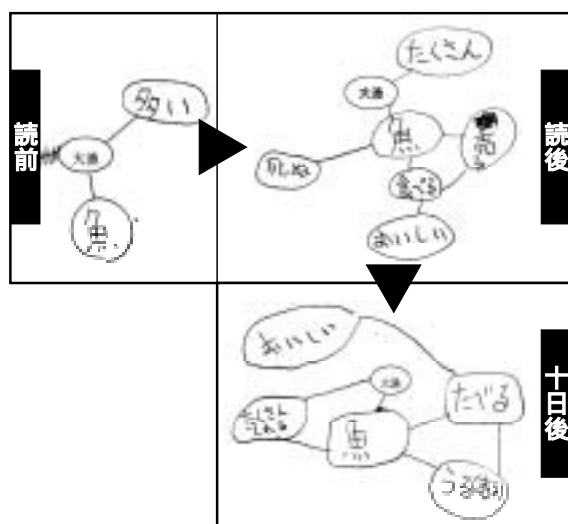


図 4-27 山間部 (多賀小 4 年生男子のサンプル)

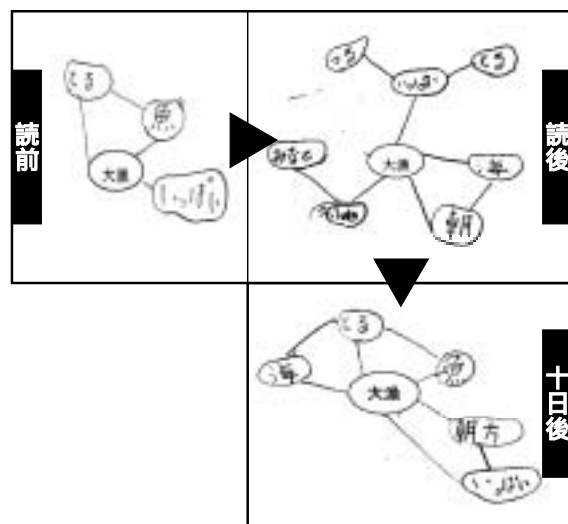


図 4-28 山間部 (多賀小 4 年生女子のサンプル)

4-5 サンプルの個別考察のまとめ

以下に、本項の考察についてまとめる。

- 人間の立場の連想に関して、品詞間のつながりに特徴は見られなかった。しかし、魚の立場の形容詞・形容動詞、魚の視点の動詞が到達連想語となる場合の連想では、名詞→形容詞・形容動詞→動詞という連想の流れが見られた。
- 「海の命」のように、魚の立場の形容詞・形容動詞、魚の視点の動詞以外にも、詩を読んで認識が深まったと考えられる連想が表れた。また、このような連想語は臨海部において見られた。
- 多賀小のみで実施した 10 日後の調査では、ほとんどの児童のイメージが定着していなかった。図 4-31 では、「朝」のイメージは定着していたが、例外としてのサンプルである。

脚注

¹⁾ 荒木紀幸：小学生の言語連想に関する心理学的研究，風間書房，pp73-88

「刺激語と反応語の品詞的な関係とその発達」の研究において、小学生 2.4.6 年生 106 名を対象に行った実験報告がある。この研究では、名詞、形容詞、動詞について、連想における品詞の組み合わせについて調査しており、名詞から名詞の連想が学年を増すにつれて増加しているという結果を見出している。また、名詞 + 形容詞、動詞の連想は学年を増すに減少するという結果を見出している。